

本節では、国語と算数の学力調査の結果を報告する。各教科について、はじめに全体と問題群、問題ごとの正答率等の状況を説明し、次に正答数の分布を示す。

結果の報告をする前に、ここでは本報告書で使用する用語について解説したい。まず、「正答数」とは、各児童について、正答を1として正答した数を足し合わせた値である。正答数の中には、準正答は含まない。「平均正答数」とは、各児童の正答数を足し合わせて、児童の人数で割った値である。次に、「平均正答率」とは、各児童について全設問における正答数の割合を算出した値(個人の正答率)を足し合わせ、児童の人数で割った値である。「問題別正答率(本節では、正答率と呼ぶ)」とは、各問題について正答している児童の割合を算出した値である。

各教科の問題は、「基礎問題」と「活用問題」という2つの問題群に分けられる。前者は、「学習指導要領にそった知識・理解」を測定する問題を指し、後者は、「教科の知識・理解に依拠した、さまざまな場面設定での課題解決力」を測定する問題を指す<sup>1</sup>。各教科とも「基礎問題」は大問①、「活用問題」は大問②、③が該当する。なお、有効回答数は、国語2,502名、算数2,507名であった。

#### 1) 国語の正答状況

まず、国語の平均正答率をみてみよう(表A-1)。国語の平均正答率は57.4%であり、平均正答数は19問中10.9問であった。標準偏差は16.7である。

次に、問題群ごとの平均正答率をみると、基礎問題は平均正答率が72.6%、平均正答数は6.5問(9問中)であり、基礎問題の平均正答率は比較的高かった。一方、活用問題の平均正答率は43.7%、平均正答数は4.4問(10問中)であり、基礎問題に比べて活用問題の平均正答率は30ポイント程度低かった。また、標準偏差は、基礎問題20.8、活用問題18.6であり、基礎問題のばらつきのほうがわずかに大きい。

次に、問題別の正答率と無答率をみていこう(表A-2)。大問①の「文学的文章」と「言語事項」の問題では、他の問題に比べて正答率が高く、「熟語の書き取り2」を除くすべての問題で約7~8割に達していた。また無答率は、選択肢問題の「文学的文章」で低く、すべての問題で1%を下回っていた。

大問②の「文学的文章」の問題では、正答率の高い問題と低い問題の差が大きかった。記述式の問題の中でも、物語の内容を理解し、登場人物の行動の理由をたずねる「内容理解1」と登場人物の行動の背景をたずねる「内容理解6」では正答率が高く、7割近かったが、その他の問題では、3割を下回っていた。また無答率は、選択肢の問題で低く、記述式の問題で高かった。

大問③の「グラフ・記事」の問題では「資料の読み取り1、2」の正答率が高く8割前後であった。一方、複数の資料を用いて説明する「3つの資料の読み取り、説明」では、正答率が9.7%と低く、無答率は20.5%と高かった。

全体的にみると、基礎問題に比べて活用問

1 今回の学力調査における問題群の分け方については、国語、算数ともにBenesse教育研究開発センター 2008『第4回学習基本調査・学力実態調査報告書』を参考にした。

題の正答率が低い傾向があるが、問題別にみると、基礎問題は全体的に正答率が高く、活用問題は正答率の高い問題と低い問題に分かれていることがわかった。特に活用問題では、登場人物の行動の背景を説明する問題〔大問

〔2〕(4)〕や複数の資料から情報を取り出し、説明する問題〔大問〔3〕(2)〕で正答率が低かった。また、全体として選択肢の問題では無答率が低く、記述式の問題では無答率が高い傾向があった。

表A-1 国語の平均正答率・平均正答数と標準偏差（全体、問題群別）

| n=2,502          |                         |      |
|------------------|-------------------------|------|
|                  | 平均正答率<br>〔 〕内は平均正答数     | 標準偏差 |
| 全体               | 57.4%<br>(10.9問 (19問中)) | 16.7 |
| 基礎問題 (大問〔1〕)     | 72.6%<br>(6.5問 (9問中))   | 20.8 |
| 活用問題 (大問〔2〕、〔3〕) | 43.7%<br>(4.4問 (10問中))  | 18.6 |

表A-2 国語の問題別正答率と無答率

|             |       |          |                     | n=2,502     |            |       |       |
|-------------|-------|----------|---------------------|-------------|------------|-------|-------|
| 質問項目        |       |          |                     | 問題<br>パターン  | 問題別<br>正答率 | 無答率   |       |
| 〔1〕<br>(基礎) | (一)   | (1)      | 文学的文章               | 語句の意味・使い方   | 選択肢        | 85.9% | 0.5%  |
|             |       | (2)      |                     | 細部の読み取り1    | 選択肢        | 67.1% | 0.7%  |
|             |       | (3)      |                     | 心情の変化の読み取り1 | 選択肢        | 74.2% | 0.5%  |
|             |       | (4)      |                     | 心情の変化の読み取り2 | 選択肢        | 79.0% | 0.5%  |
|             |       | (5)      |                     | 細部の読み取り2    | 選択肢        | 69.1% | 0.8%  |
|             | (二)   | ①        | 言語事項                | 漢字の書き取り1    | 記述         | 72.9% | 6.4%  |
|             |       | ②        |                     | 漢字の書き取り2    | 記述         | 70.1% | 6.2%  |
|             | (三)   | ①        |                     | 熟語の書き取り1    | 記述         | 83.7% | 2.3%  |
| ②           |       | 熟語の書き取り2 |                     | 記述          | 50.9%      | 8.6%  |       |
| 〔2〕<br>(活用) | (1)   | 文学的文章    | 表現の効果の読み取り          | 選択肢         | 49.0%      | 0.9%  |       |
|             | (2)   |          | 理由<br>最もよく分<br>かる部分 | 内容理解1       | 記述         | 67.9% | 6.8%  |
|             |       |          |                     | 内容理解2       | 記述         | 24.6% | 13.6% |
|             | (3)   |          | ①                   | 内容理解3       | 記述         | 25.9% | 16.1% |
|             |       |          | ②                   | 内容理解4       | 記述         | 24.7% | 17.6% |
|             | (4)   |          | 内容理解5               | 記述          | 0.5%       | 9.8%  |       |
| (5)         | 内容理解6 | 記述       | 69.5%               | 11.0%       |            |       |       |
| 〔3〕<br>(活用) | (1)   | グラフ・記事   | 資料の読み取り1            | 選択肢         | 86.5%      | 4.6%  |       |
|             |       |          | 資料の読み取り2            | 選択肢         | 79.0%      | 4.9%  |       |
|             | (2)   |          | 3つの資料の読み取り、説明       | 記述          | 9.7%       | 20.5% |       |

## 2) 国語の正答数の分布

次に、全体と問題群ごとの正答数の分布をみることによって、正答状況の歪みやばらつき傾向をみてみたい。

国語全体の正答数の分布は、12問を中心とした山型の分布をなしている（図 A-1）。正規分布に近い形ではあるが、正答率が低い児童が少数いることにより、分布がやや左に裾を引いていることがわかる。

次に、問題群ごとの正答数の分布をみていこう（図 A-2、3）。基礎問題の分布をみると、7、8問を中心とした山型になっていることがわかる。ただし、正答数が高いほうに集中している一方で正答率の低い児童が少数いるために歪みが大きく、左に裾を引いた分布になっている。

次に、活用問題の正答数の分布をみると、4問を中心とした山型の分布をなしており、正規分布に近いことがわかる。基礎問題よりもばらつきの度合いは小さく、平均値の前後

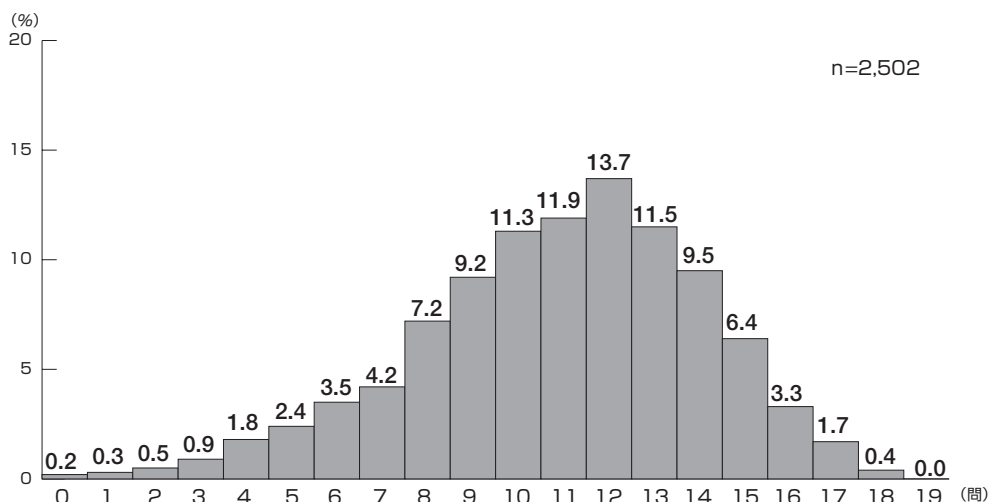
に度数が集中していることがわかった。

## 3) 算数の正答状況

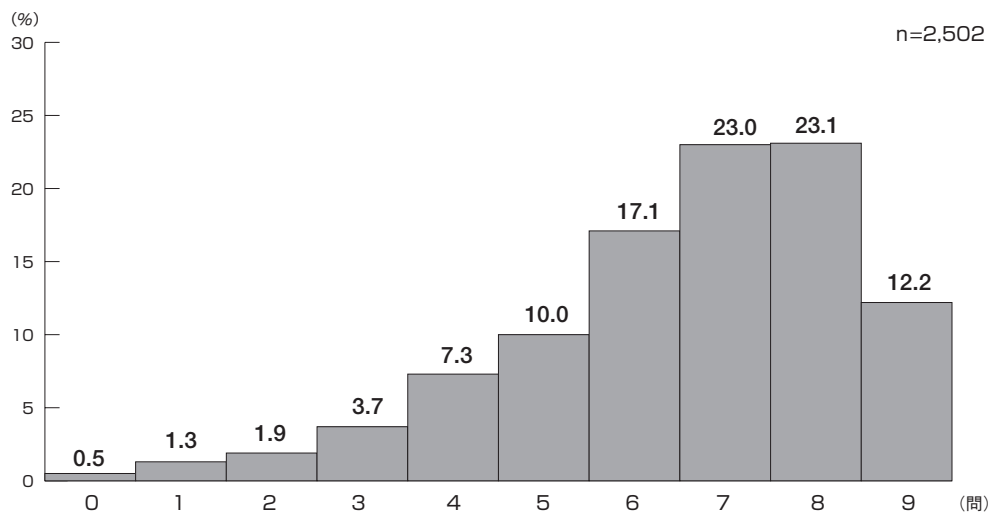
つづいて、算数の平均正答率をみていこう（表 A-3）。算数の平均正答率は56.5%であり、平均正答数は18問中10.2問であった。標準偏差は19.6であり、正答率のばらつきは国語よりも算数のほうがわずかに大きかった。

次に、問題群ごとの平均正答率をみてみよう。基礎問題の平均正答率は74.3%、平均正答数は8.2問（11問中）であり、基礎問題の平均正答率は比較的高かった。一方、活用問題の平均正答率は28.5%、平均正答数は2.0問（7問中）であり、基礎問題に比べて活用問題の平均正答率は45ポイントほど低かった。全体の平均正答率は56.5%であるが、問題群による正答率の差が大きいことがわかった。ただし、問題群による標準偏差の差は少ないため、問題群ごとのばらつきには大きな差はないといえる。

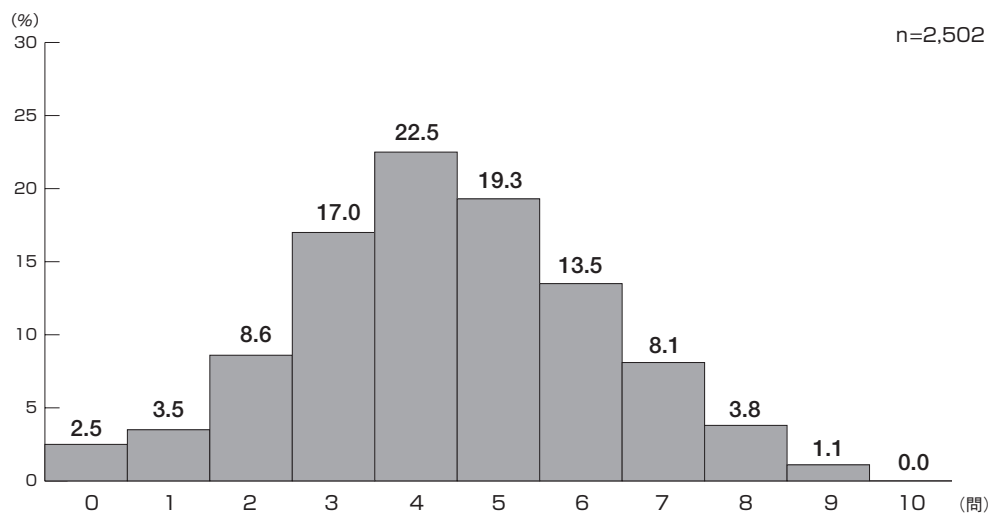
図 A-1 国語の正答数の分布（全体）



図A-2 国語の正答数の分布（基礎問題）



図A-3 国語の正答数の分布（活用問題）



表A-3 算数の平均正答率・平均正答数と標準偏差（全体、問題群別）

n=2,507

|              | 平均正答率<br>〔 〕内は平均正答数     | 標準偏差 |
|--------------|-------------------------|------|
| 全体           | 56.5%<br>(10.2問 (18問中)) | 19.6 |
| 基礎問題 (大問①)   | 74.3%<br>(8.2問 (11問中))  | 23.2 |
| 活用問題 (大問②、③) | 28.5%<br>(2.0問 (7問中))   | 22.8 |

次に、問題別の正答率と無答率をみていこう(表 A-4)。大問 1 では、ほとんどの問題において正答率が7割を超えていた。ただし、「整数の除法に関わる変数」と「依存関係にある2つの数量のきまりの発見」では、他の問題と比べて正答率が低く、ともに5割程度であった。また、大問 1 の無答率は、全体的に低いものの「2つの数量のきまりの発見」では比較的高く、10%を超えていた。

大問 2 の「量と測定」では、正答率の高い問題と低い問題に分かれた。「グラフの名称」を答える問題の正答率は、50%前後であったが、そのグラフを選択した「理由」につ

いてたずねる問題では、正答率が15%前後と低かった。

大問 3 の「空間と形」では、美術館の床の面積を式や言葉で説明しながら求める「情報の取り出しと面積の計算」の問題と3種類のタイルを組み合わせて正方形を作る「与えられた条件に合致する数の組み合わせ2」の問題の正答率が1割強と低かった。一方、1種類のタイルで正方形を作る「与えられた条件に合致する数の組み合わせ1」の問題の正答率は4割強であり、比較的高かった。

全体的には、基礎問題よりも活用問題で正答率が低かった。活用問題の中でも特に式や

表A-4 算数の問題別正答率と無答率

n=2,507

| 質問項目      |     |                     |                      | 問題別<br>正答率    | 無答率   |       |
|-----------|-----|---------------------|----------------------|---------------|-------|-------|
| 1<br>(基礎) | (1) | ①                   | 数と計算                 | 小数の加法         | 77.1% | 0.5%  |
|           |     | ②                   |                      | 小数の減法         | 70.4% | 0.6%  |
|           |     | ③                   |                      | 小数の乗法         | 77.5% | 0.6%  |
|           | (2) | 左1                  | 量と測定                 | 複合図形の求積と式1    | 79.8% | 1.6%  |
|           |     | 左2                  |                      | 複合図形の求積と式2    | 73.3% | 2.0%  |
|           |     | 左3                  |                      | 複合図形の求積と式3    | 74.6% | 1.7%  |
|           |     | 左4                  |                      | 複合図形の求積と式4    | 79.5% | 2.0%  |
|           | (3) |                     | 数と計算                 | 整数の除法に関わる変数   | 58.9% | 4.2%  |
|           | (4) | ①上                  | 数量関係                 | 依存関係にある2つの数量1 | 85.5% | 1.6%  |
|           |     | ①下                  |                      | 依存関係にある2つの数量2 | 86.7% | 1.7%  |
| ②         |     | 依存関係にある2つの数量のきまりの発見 |                      | 54.3%         | 14.1% |       |
| 2<br>(活用) | (1) | 表1                  | 量と測定                 | グラフの名称1       | 54.0% | 10.1% |
|           |     | 表2                  |                      | グラフの名称2       | 47.5% | 10.1% |
|           | (2) | 表1                  |                      | グラフの選択理由の説明1  | 16.0% | 17.0% |
|           |     | 表2                  |                      | グラフの選択理由の説明2  | 14.0% | 16.8% |
| 3<br>(活用) | (1) |                     | 情報の取り出しと面積の計算        | 11.9%         | 12.7% |       |
|           | (2) | (ア)                 | 与えられた条件に合致する数の組み合わせ1 | 42.9%         | 8.6%  |       |
|           |     | (イ)                 | 与えられた条件に合致する数の組み合わせ2 | 13.6%         | 14.4% |       |

言葉を使って説明をする問題〔大問 2〕(2)、大問 3〕(1)〕や厳しい条件設定の中で解を求める問題〔大問 3〕(2) (イ)〕では正答率が低かった。また、基礎問題よりも活用問題で無答率が高かった。

#### 4) 算数の正答数の分布

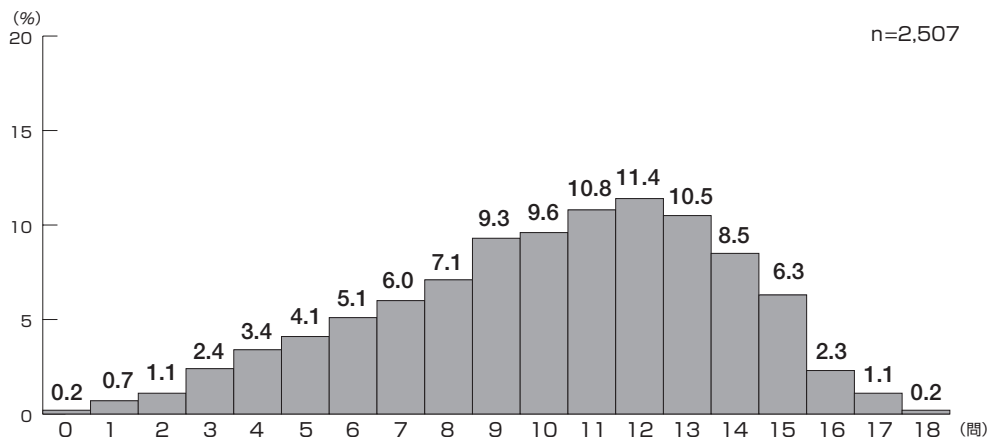
次に、算数の正答数の分布をみていこう(図 A-4)。全体の分布は、12問を中心としたなだらかな山型の分布となっている。

問題群ごとの正答数の分布についてみると、基礎問題の分布は10問と11問に集中し

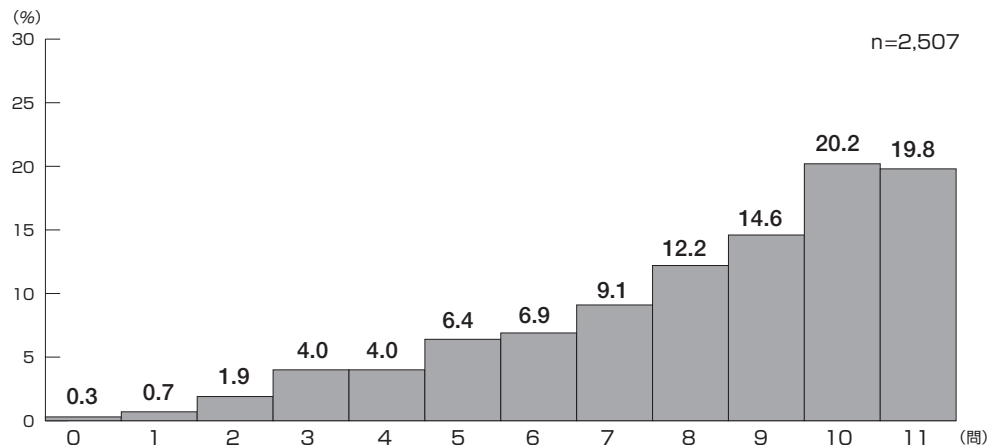
ていることがわかる(図 A-5)。11問中10問以上正答した児童は、全体の40%にのぼる。ただし、正答率の低い児童もいることから、平均正答数が8.2問と低くなっている。

一方、活用問題の分布をみると、基礎問題とは対照的に正答数が0問～2問に集中していることがわかる(図 A-6)。正答数が2問以下の児童が全体の60%を超えており、正答数が0問の児童も20%を超えている。平均正答数は2.0問であるが、正答率の低い児童が多いことが特徴である。

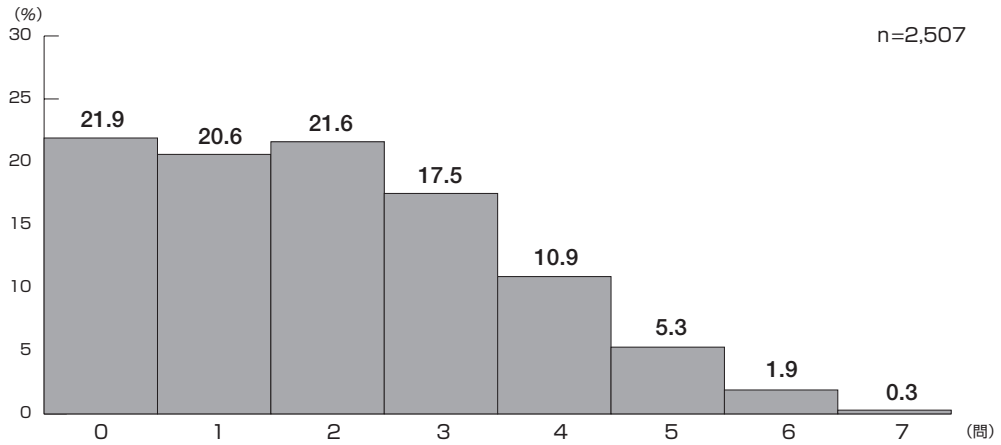
図A-4 算数の正答数の分布(全体)



図A-5 算数の正答数の分布(基礎問題)



図A-6 算数の正答数の分布（活用問題）



●参考文献

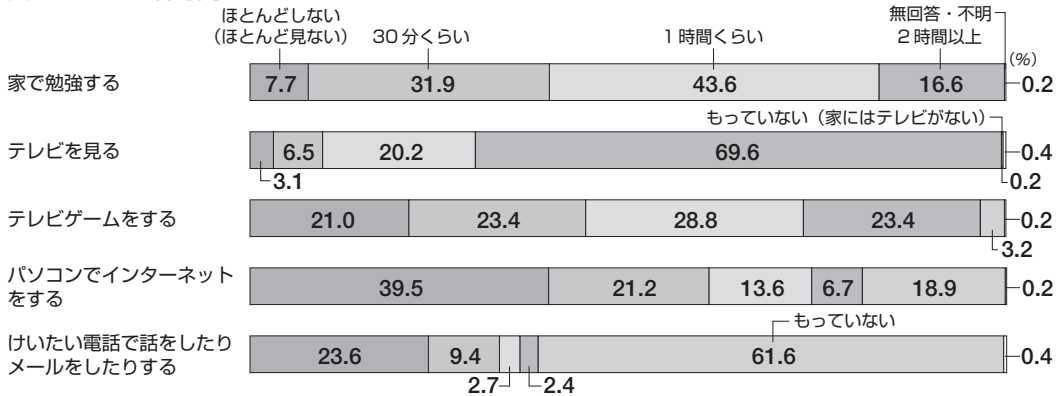
Benesse教育研究開発センター 2008『第4回学習基本調査・学力実態調査報告書』ベネッセコーポレーション

## 1. 生活時間

学習時間は学力と正の相関、テレビやテレビゲームは負の相関がある。

◎ あなたは平日（学校がある日）、1日あたり、つぎのことをどのくらいしますか。

図B-1 生活時間



注1) 「2時間以上」は「2時間くらい」「3時間くらい」「3時間以上」の回答の合計。

注2) サンプル数は2,509名。

表B-1 生活時間の平均（全体、国語学力階層／算数学力階層別）

(分)

|                       | 全体    | 国語学力  |       |        | 算数学力  |       |        |
|-----------------------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|
|                       |       | A層    | D層    | 差(A-D) | A層    | D層    | 差(A-D) |
| 家で勉強する                | 60.9  | 78.9  | 51.0  | 27.9   | 69.4  | 51.1  | 18.3   |
| テレビを見る                | 134.9 | 116.7 | 144.6 | -27.9  | 125.2 | 142.2 | -17.0  |
| テレビゲームをする             | 61.5  | 45.9  | 74.0  | -28.1  | 51.9  | 77.5  | -25.6  |
| パソコンでインターネットをする       | 24.8  | 22.4  | 23.7  | -1.3   | 22.8  | 25.9  | -3.1   |
| けいたい電話で話をしたりメールをしたりする | 8.7   | 6.5   | 10.9  | -4.4   | 7.0   | 11.3  | -4.3   |

注1) 「ほとんどしない(ほとんど見ない)」と「もっていない(家にはテレビがない)」は0分、「30分くらい」は30分、「3時間以上」は240分というように、時間に換算して平均値を算出した。無回答・不明は分析から除外した。また、B層とC層は表から省略した。

注2) サンプル数は全体2,509名。

図B-1は、子どもたちの生活時間を示している。これを見ると、「家で勉強する」は「30分くらい」「1時間くらい」が多く、この2つで7割を超える。また、「テレビを見る」は、「2時間以上」が約7割である。「テレビゲームをする」は回答が分かれており、「ほとんどしない」と「30分くらい」の合計が44.4%いる一方で、「1時間くらい」と「2時間以上」の合計も52.2%である。「パソコンでインターネットをする」「けいたい電話で話をしたりメールをしたりする」は、「ほと

んどしない」「もっていない」という回答が多かった。

この回答を平均時間に換算して学力別に示したのが、表B-1である。ここからは、「家で勉強する」時間が、国語、算数ともに学力と正の相関をもっていることがわかる。また、「テレビを見る」時間や「テレビゲームをする」時間とは、負の相関がある。このように、生活における時間の使い方と学力には密接な関係があるようだ。

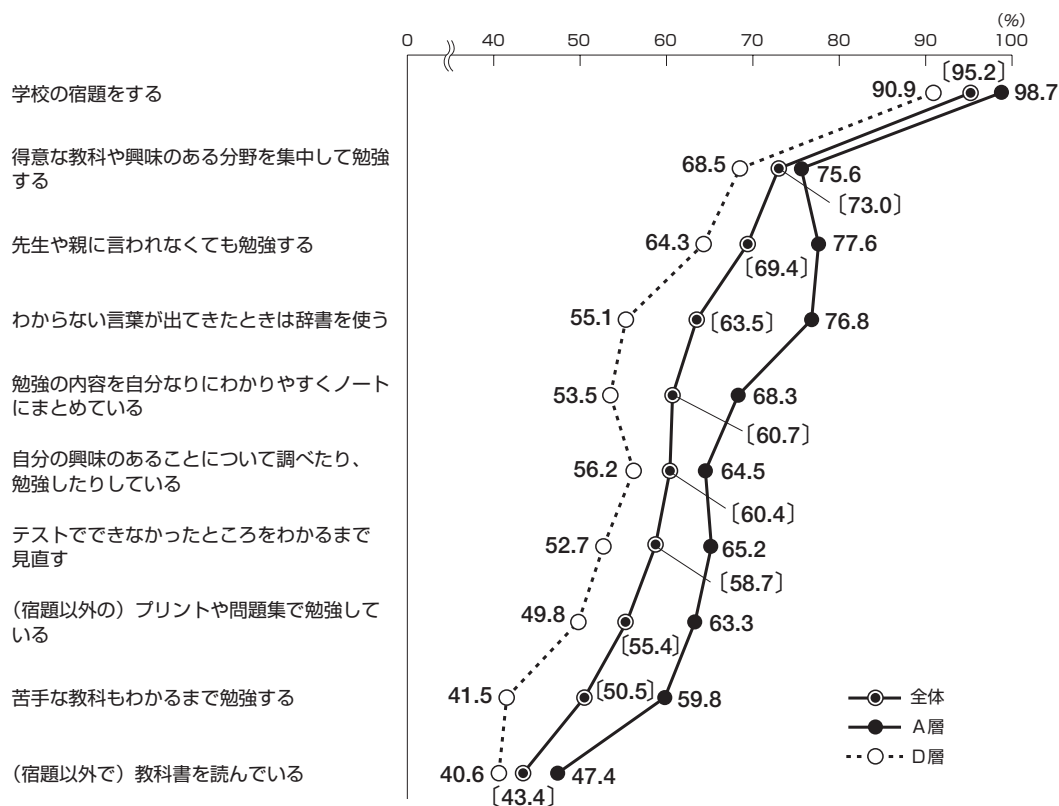


## 2. 家での勉強方法

学力が高い子どもは、家庭で積極的に勉強をしている。

あなたは、家でつぎのようなことをどのくらいしていますか。

図B-2 家での勉強方法（全体、国語学力階層別）



注1) 数値は「よくしている」と「ときどきしている」の合計の比率。〔 〕内は全体値。

注2) B層およびC層の数値は、図から省略した。

注3) サンプル数は全体2,509名。

図B-2は、家での勉強方法について、全体と国語学力階層別（A層とD層のみ）の数値を示した。全体の数値が大きいのは、「学校の宿題をする」が95.2%（「よくしている」+「ときどきしている」）である。次いで、「得意な教科や興味のある分野を集中して勉強する」「先生や親に言われなくても勉強する」「わからない言葉が出てきたときは辞書を使う」で、これらは7割前後が行っている。

ここに示した項目はすべて学力と相関があり、学力が高いA層ほど「している」割合が

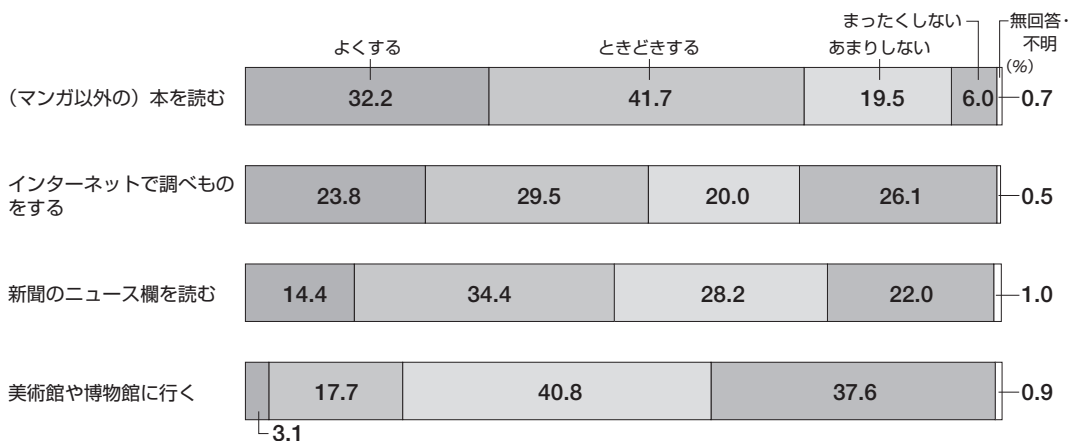
高い。ただし、項目によってA層とD層の差が異なっている。両者の差が大きいのは、「わからない言葉が出てきたときは辞書を使う」（21.7ポイント差）、「苦手な教科もわかるまで勉強する」（18.3ポイント差）、「勉強の内容を自分なりにわかりやすくノートにまとめている」（14.8ポイント差）などで、学力の上位層（A層）ほど、手間のかかる学習や苦手科目の対策を行っていることがわかる。このような傾向は、算数でもあまり変わらなかった。

### 3. 授業や宿題以外の学び

本を読むことが、とくに国語の学力と強い関連をもっている。

◎ あなたは、ふだん、学校の授業や宿題以外で、つぎのことをどのくらいしますか。

図B-3 授業や宿題以外の学び



注) サンプル数は2,509名。

表B-2 授業や宿題以外の学び (全体、国語学力階層／算数学力階層別)

|                 | 全体 (%) | 国語学力   |        |         | 算数学力   |        |         |
|-----------------|--------|--------|--------|---------|--------|--------|---------|
|                 |        | A層 (%) | D層 (%) | 差 (A-D) | A層 (%) | D層 (%) | 差 (A-D) |
| (マンガ以外の) 本を読む   | 73.9   | 84.4   | 64.5   | 19.9    | 79.4   | 66.0   | 13.4    |
| インターネットで調べものをする | 53.3   | 56.6   | 46.8   | 9.8     | 56.5   | 47.0   | 9.5     |
| 新聞のニュース欄を読む     | 48.8   | 56.4   | 45.8   | 10.6    | 53.7   | 44.1   | 9.6     |
| 美術館や博物館に行く      | 20.8   | 24.7   | 19.5   | 5.2     | 24.6   | 18.3   | 6.3     |

注1) 数値は「よくする」と「ときどきする」の合計の比率。

注2) B層およびC層の数値は、表から省略した。

注3) サンプル数は全体2,509名。

授業や宿題以外の学びについてたずねたところ、「よくする」と「ときどきする」の数値がもっとも大きいのは、「(マンガ以外の)本を読む」(73.9%)であった(図B-3)。続いて、「インターネットで調べものをする」と「新聞のニュース欄を読む」が5割前後、「美術館や博物館へ行く」がおよそ2割となっている。

これらの行動が学力と関連をしているのかを確かめたのが、表B-2である。ここから

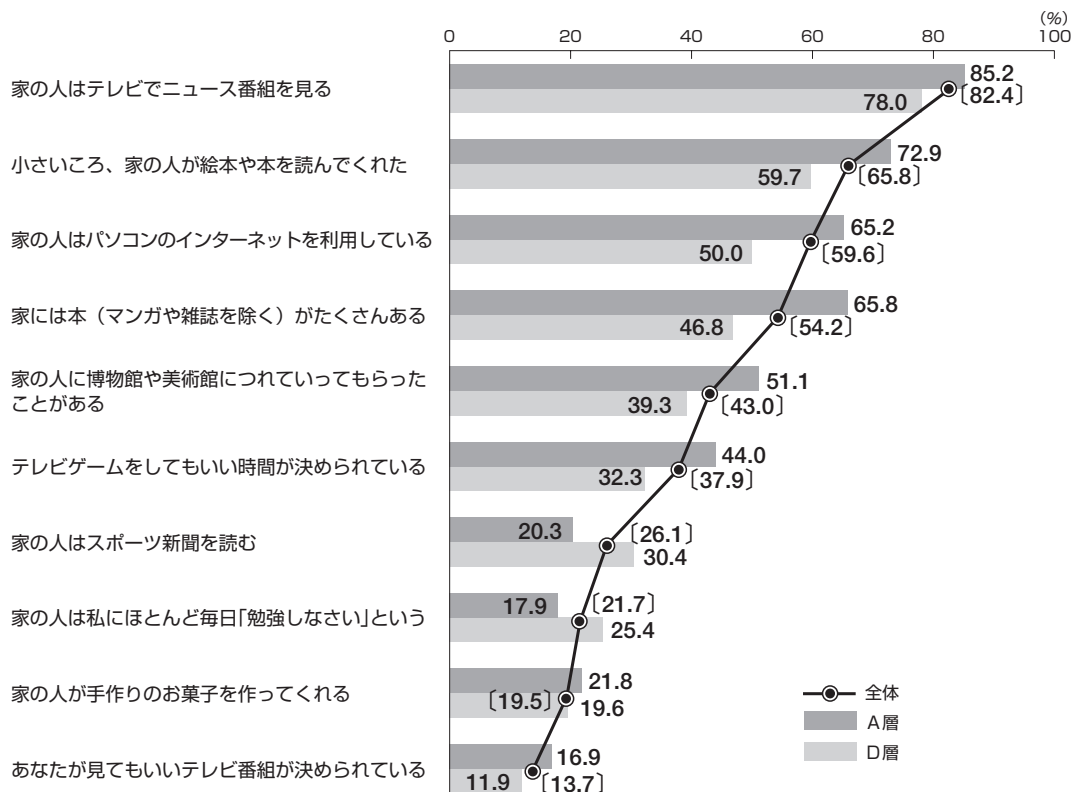
は、いずれの行動も学力水準との相関がある様子がみとれる。とくに強い関連が表れているのは「(マンガ以外の)本を読む」であり、A層とD層の差は国語で19.9ポイント開いていた。読書の頻度は、国語の学力形成に大きな影響を与えている可能性が高い。また、この項目については、算数でもA層とD層で13.4ポイントの差があり、国語以外の学力とも一定の関係があると推察される。

## 4. 子どもからみた保護者の様子

学力が高い子どもの家庭では、保護者自身も知的な活動をしている。

Q あなたの家のことについてお聞きします。

図B-4 子どもからみた保護者の様子（全体、国語学力階層別）



注1) 数値は「あてはまる」の比率。「あてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」の3つの選択肢の中から選んでもらった。  
〔 〕内は全体値。

注2) B層およびC層の数値は、図から省略した。

注3) サンプル数は全体2,509名。

図B-4は、子どもからみた保護者の様子について、全体と国語学力階層別（A層とD層のみ）の数値を示した。ここからは、主に次のようなことがわかる。

第一に、「家の人はテレビでニュース番組を見る」「家には本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある」など、保護者自身の知的な活動と子どもの学力に関連がみられる。第二に、学力の上位層（A層）ほど、保護者からの知的な働きかけを受けている。D層に比べてA層は、「小さいころ、家の人が絵本や本

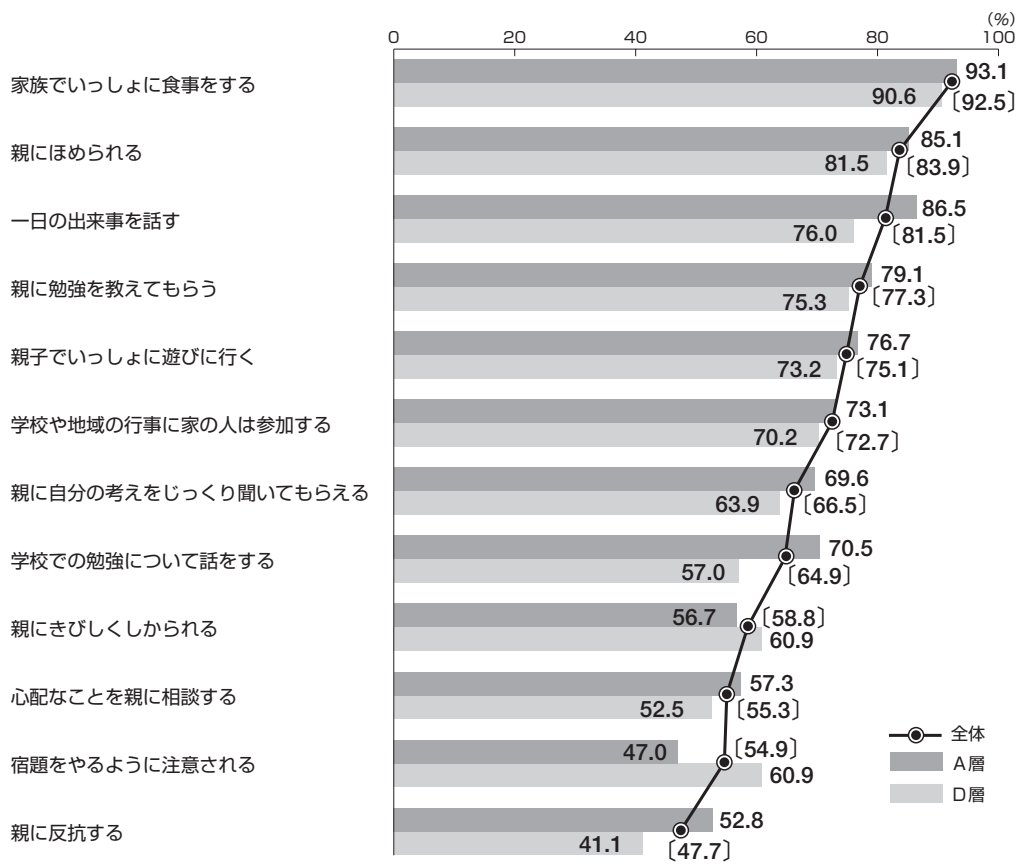
を読んできた」「家の人に博物館や美術館につれていってもらったことがある」で、「あてはまる」の比率が高い。第三に、学力の上位層（A層）の家庭では、家のルールが決められている傾向がある。「テレビゲームをしてもいい時間が決められている」「あなたがとてもいいテレビ番組が決められている」は、A層のほうが肯定している。ここに示した3つの傾向は、算数でもあまり変わらなかった。

## 5. 親子関係

学力が高い子どもは、保護者との会話が早い傾向がある。

Q あなたの家では、つぎのようなことがありますか。

図B-5 親子関係（全体、国語学力階層別）



注1) 数値は「よくある」と「ときどきある」の合計の比率。〔 〕内は全体値。  
 注2) B層およびC層の数値は、図から省略した。  
 注3) サンプル数は全体2,509名。

続けて、親子関係を明らかにするために、図B-5に示した項目について、「ある」（「よくある」＋「ときどきある」）かどうかをたずねた。ここからは全体に、A層とD層で差のある項目がそれほど多くないことがわかる。

しかし、そのなかでも、「一日の出来事を話す」「学校での勉強について話をする」の2項目は、学力の上位層（A層）ほどよくしているようだ。会話が早いということは、保護者から知的なことを吸収できるという利点

や、親子関係が安定しているがゆえに安心して学習に向かえるという利点がある。また、「親に反抗する」でも、学力の上位層（A層）のほうが肯定率は高いが、これも親子が親密で、かつ対等に近い関係であるためだと考えられる。一方で、「宿題をやるように注意される」は、学力の下位層（D層）に「ある」の比率が高かった。子どもが学習に向かえないために、そのようなかわりが多くなるのだろう。

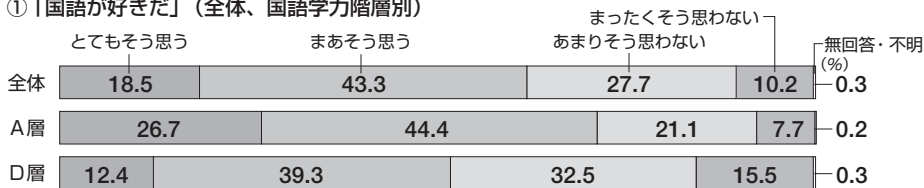
## 6. 教科に対する意識

学力が高い子どもは、教科が「役に立つ」という意識を強くもっている。

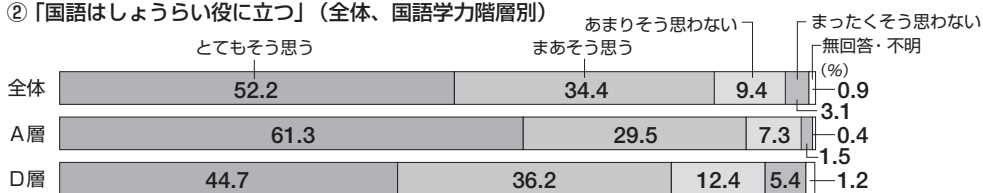
あなたは、国語や算数についてどのように思っていますか。

図B-6 教科に対する意識

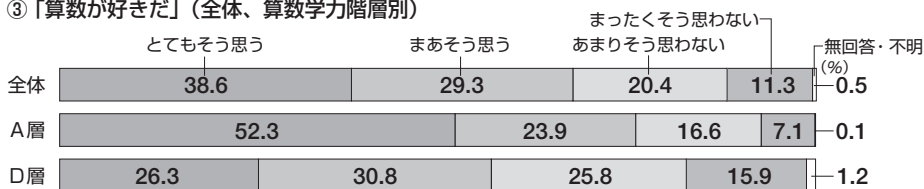
①「国語が好きだ」（全体、国語学力階層別）



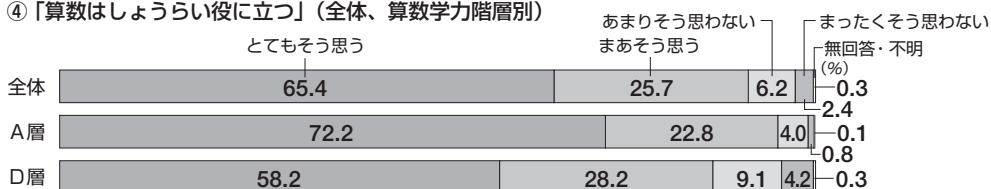
②「国語はしょうらい役に立つ」（全体、国語学力階層別）



③「算数が好きだ」（全体、算数学力階層別）



④「算数はしょうらい役に立つ」（全体、算数学力階層別）



注1) B層およびC層の数値は、図から省略した。

注2) サンプル数は全体2,509名。

国語も算数も、学力が高いA層の子どもほど、その教科が「好きだ」「しょうらい役に立つ」という思いを肯定している(図B-6)。「そう思う」(「とてもそう思う」+「まあそう思う」)のA層とD層の差は、「好きだ」については20ポイント弱、「しょうらい役に立つ」については10ポイント弱で、国語も算数も大きく変わらない。とはいえ、D層であっても「好きだ」に「そう思う」と回答した割合は、半数を超えていて、必ずしも少ないとは言え

ない。さらに、「しょうらい役に立つ」についても8割以上が「そう思う」と答えており、学力の状況を問わずほとんどの子どもが「役に立つ」という意識をもっていることがわかる。

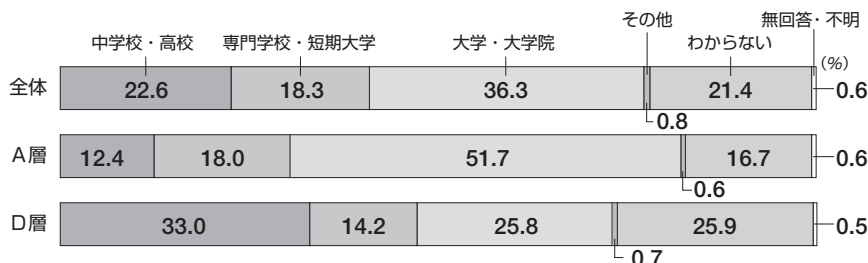
国語と算数の違いに注目すると、「好きだ」「しょうらい役に立つ」ともに、算数のほうが「とてもそう思う」の割合が高い。図は省略したが、「授業はよく分かる」「だれにとっても大切だ」も同様の傾向である。小学生にとって算数は、思い入れが強い教科のようだ。

## 7. 希望する進学段階

学力上位層（A層）の半分は、「大学・大学院」を希望している。

◎ あなたは、しょうらい、どの学校まで進みたいと思っていますか。

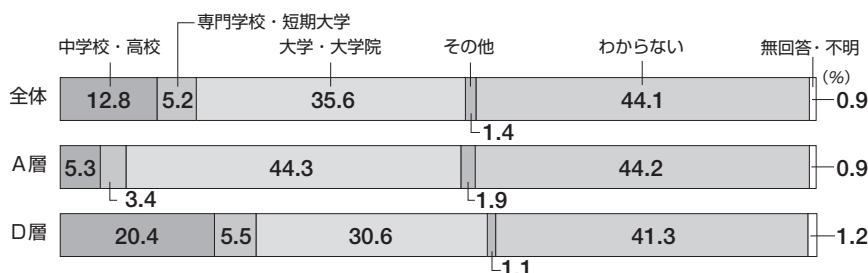
図B-7 希望する進学段階（全体、国語学力階層別）



注1) 「中学校・高校」は「中学校まで」と「高校まで」の合計、「専門学校・短期大学」は「専門学校まで」と「短期大学まで」の合計、「大学・大学院」は「大学まで」と「大学院まで」の合計の数値を示す。  
 注2) B層およびC層の数値は、図から省略した。  
 注3) サンプル数は全体2,509名。

◎ あなたの家の人は、あなたにどの学校まで進んでほしいと思っていますか。

図B-8 保護者が期待していると思う進学段階（全体、国語学力階層別）



注1) 「中学校・高校」は「中学校まで」と「高校まで」の合計、「専門学校・短期大学」は「専門学校まで」と「短期大学まで」の合計、「大学・大学院」は「大学まで」と「大学院まで」の合計の数値を示す。  
 注2) B層およびC層の数値は、図から省略した。  
 注3) サンプル数は全体2,509名。

図B-7は、子ども本人に希望する進学段階をたずねた結果である。全体では、「中学校・高校」と「専門学校・短期大学」が2割前後、「大学・大学院」が4割弱で、「わからない」が2割いる。国語学力階層別にみると、学力上位層（A層）では、半数以上が「大学・大学院」を希望しているのに対して、学力下位層（D層）では4人に1人しか希望していない。将来に対する希望と学力は、関連をもっていることがわかる。図B-8に示した保護者が期待していると思う進学段階につ

いても、「わからない」という回答が多いものの、傾向は同様だ。A層は「大学・大学院」までを期待されているという意識が、D層に比べて強い。

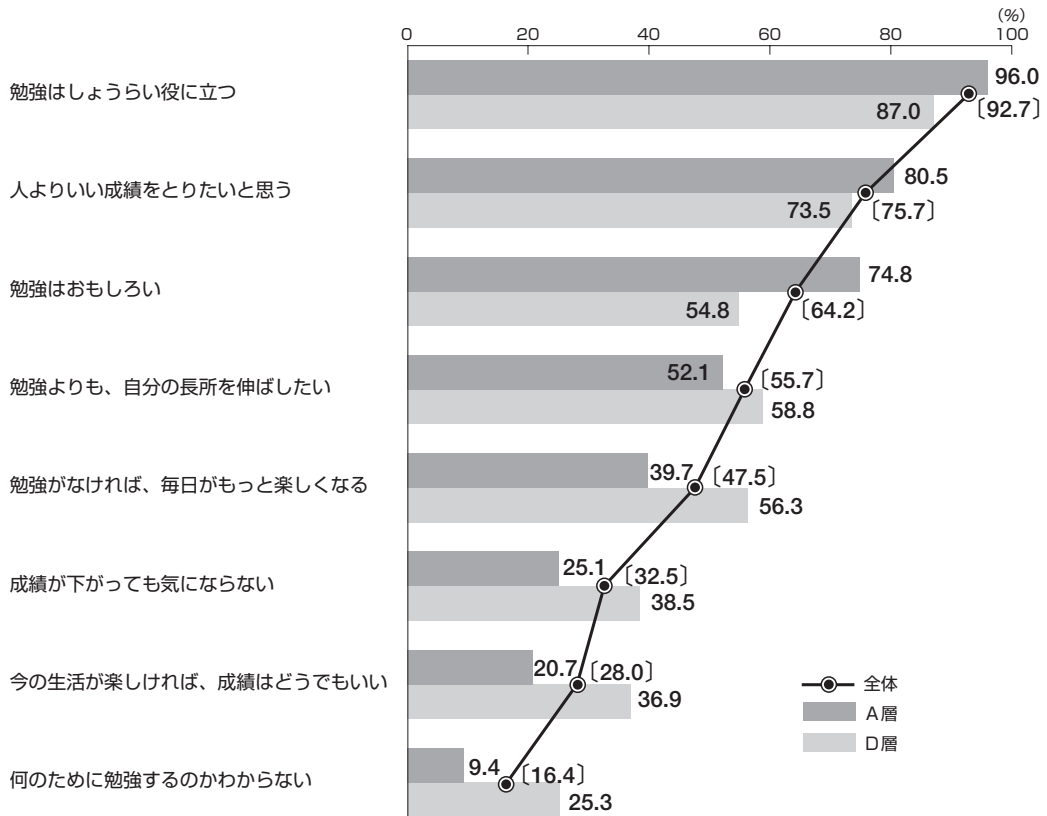
さらに、保護者から感じる期待と本人の希望には、高い相関がある。保護者から「大学・大学院」までを期待されていると感じている子の65.9%は、本人も「大学・大学院」を希望している（図省略）。学力上位層は、親から高い期待を受け、本人もそれを望んでいる。

## 8. 勉強に対する意識

学力が高い子どもは、勉強が「役に立つ」という意識を強くもっている。

あなたは勉強について、つぎのようなことを考えていますか。

図B-9 勉強に対する意識（全体、国語学力階層別）



注1) 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計の比率。〔 〕内は全体値。

注2) B層およびC層の数値は、図から省略した。

注3) サンプル数は全体2,509名。

本節の最後に、勉強に対する全般的な意識が学力とどう関連しているのかを確認しよう。図B-9は、勉強に対する意識について、全体と国語学力階層別（A層とD層のみ）に示したものである。これをみると、「勉強はしょうらい役に立つ」という意識、「人よりいい成績をとりたいと思う」という競争心は、学力上位層（A層）のほうが肯定している。また、「勉強はおもしろい」については、A層とD層の差が20.0ポイントと大きく開いて

おり、学力上位層ほど勉強することの面白さを実感していることが示されている。

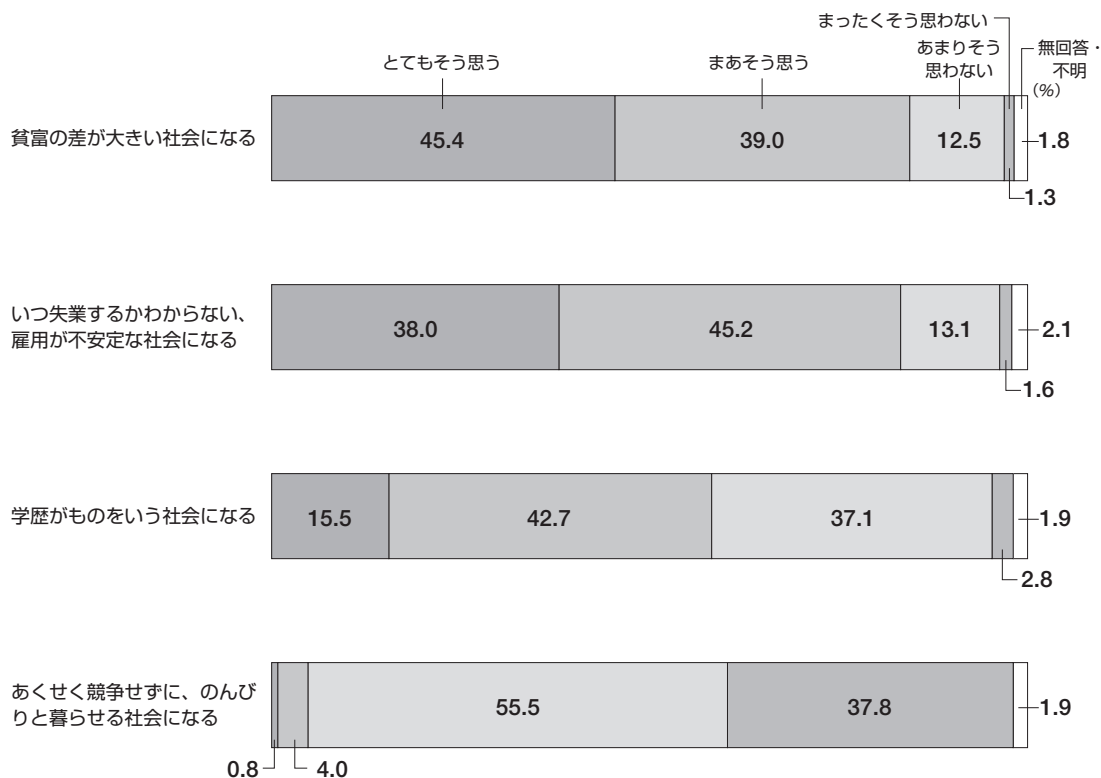
一方で、「勉強がなければ、毎日がもっと楽しくなる」という思いは、学力下位層（D層）ほど強い。「成績が下がっても気にならない」「今の生活が楽しければ、成績はどうでもいい」といった投げやりな気持ちにもなりやすく、学習上のサポートをより必要としている。こうした傾向は、算数の学力階層別にみても変わらない(図省略)。

## 1. 保護者の未来の社会像

6割近くが「学歴がものをいう社会になる」と考えている。

◎ お子様が大人数になるころ、今と比べてどのような社会になるとお考えですか。

図C-1 未来の社会像



注) サンプル数は、2,533名。

大半の保護者にとって未来の社会像は悲観的なほうに傾いている。「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の比率で見たとき、84.4%が「貧富の差が大きい社会になる」と考えている(図C-1)。また、「いつ失業するかわからない、雇用が不安定な社会になる」では83.2%となっている。「学歴がものをいう社会になる」では、58.2%である。「あくせく競

争せずに、のんびりと暮らせる社会になる」という楽観的な未来の社会像を描く人は少なく、「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の比率は4.8%に過ぎない。

グラフにて提示はしていないが、子どもの学力階層別にこれらの数値を見てみると、学力階層による顕著な差は認められなかった。

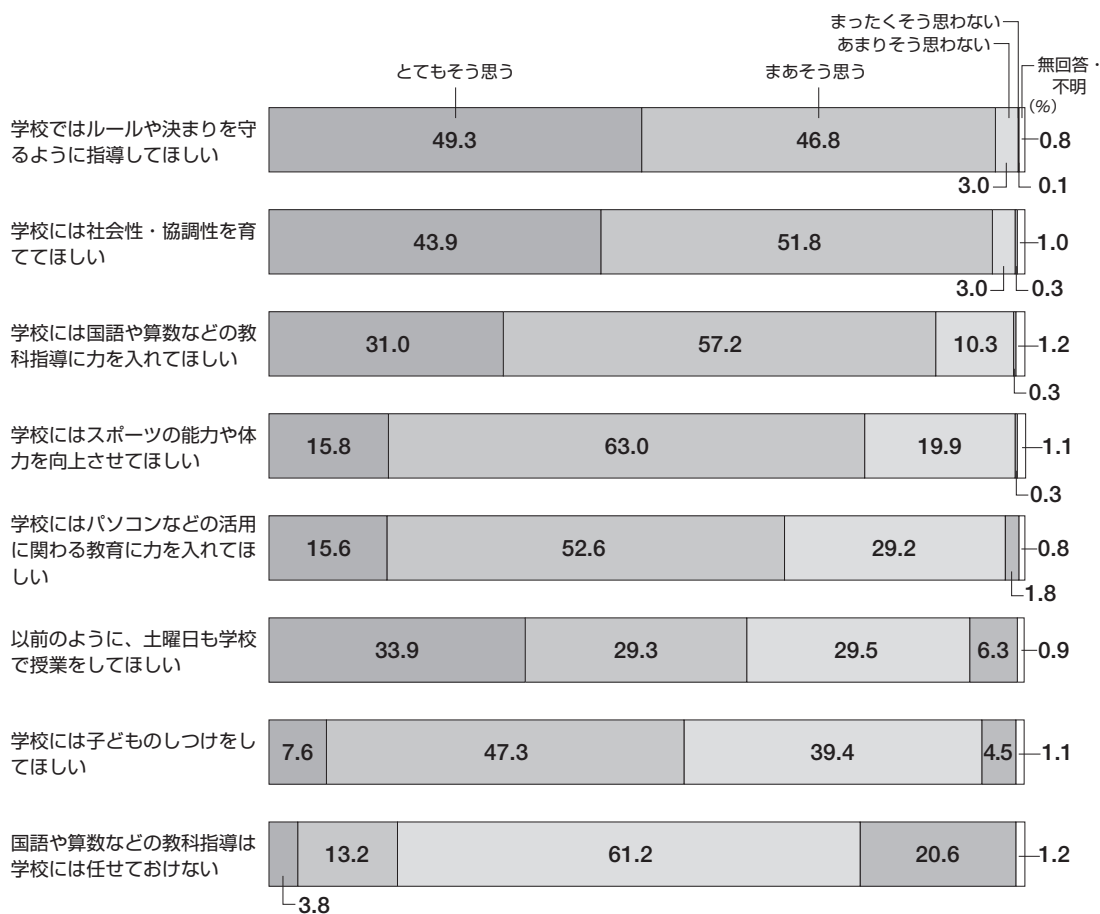


## 2. 保護者の学校への要望

学校で育ててほしい力は、国語・算数より社会性・協調性。

◎ あなたは、お子様が通う学校の指導について、どのようにお考えですか。

図C-2 保護者の学校への要望



注) サンプル数は、2,533名。

この問いで示した8つの項目のうち、「とてもそう思う」の比率に注目すると(図C-2)、最も高かったのは「学校ではルールや決まりを守るように指導してほしい」(「とてもそう思う」が49.3%)、次いで「学校には社会性・協調性を育ててほしい」(43.9%)となった。これらは「学校には国語や算数などの教科指導に力を入れてほしい」(31.0%)を上回っている。

「学校にはパソコンなどの活用に関わる教育に力を入れてほしい」や「学校にはスポーツの能力や体力を向上させてほしい」も、「とてもそう思う」では15%台にとどまるものの、「まあそう思う」を足した値はそれぞれ、7割、8割近い。

「以前のように、土曜日でも学校で授業をしてほしい」に関しては、他の項目と比較して賛成派も反対派もともに多いのが特徴である。

### 3. 保護者の学校への要望（子どもの学力階層別）

土曜日の授業再開への要望については、学力階層との関係が大きい。

◎ あなたは、お子様が通う学校の指導について、どのようにお考えですか。

表C-1 保護者の学校への要望（子どもの国語・算数学力階層別）

(%)

|                              | 国語   |      |      |      | 算数   |      |      |      |
|------------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|                              | A層   | B層   | C層   | D層   | A層   | B層   | C層   | D層   |
| 学校には国語や算数などの教科指導に力を入れてほしい    | 35.6 | 33.1 | 28.9 | 27.1 | 32.4 | 33.2 | 28.7 | 29.9 |
| 学校にはパソコンなどの活用に関わる教育に力を入れてほしい | 13.1 | 15.2 | 16.7 | 16.9 | 12.6 | 15.1 | 17.7 | 17.9 |
| 学校にはスポーツの能力や体力を向上させてほしい      | 17.4 | 12.8 | 16.5 | 16.5 | 15.5 | 15.6 | 14.3 | 18.1 |
| 国語や算数などの教科指導は学校には任せておけない     | 6.6  | 3.5  | 2.2  | 3.0  | 3.7  | 4.1  | 3.7  | 3.6  |
| 学校ではルールや決まりを守るように指導してほしい     | 51.0 | 47.7 | 49.2 | 49.3 | 47.6 | 49.2 | 49.6 | 51.4 |
| 学校には社会性・協調性を育ててほしい           | 50.3 | 43.9 | 43.7 | 39.4 | 46.2 | 44.2 | 43.9 | 41.3 |
| 学校には子どものしつけをしてほしい            | 7.9  | 9.0  | 7.6  | 6.5  | 7.3  | 6.5  | 8.6  | 8.2  |
| 以前のように、土曜日も学校で授業をしてほしい       | 30.6 | 30.6 | 33.6 | 39.1 | 29.5 | 33.9 | 33.8 | 39.6 |

注1) 数値は、「とてもそう思う」と答えた比率。

注2) 網掛けは最大値と最小値の差が5ポイント以上ある場合の最大値。

前頁にて賛否が分かれる傾向を指摘した「以前のように、土曜日も学校で授業をしてほしい」は、学力階層別にみると、国語、算数ともにD層（学力テストの得点下位層）で最大となっている（表C-1）。その他、「学校にはパソコンなどの活用に関わる教育に力を入れてほしい」でも、D層が最大となる。国語、算数に共通してみられる傾向で、逆にA層が最大の値を示すのは「学校には社会

性・協調性を育ててほしい」である。

全体の値では最も高かった「学校ではルールや決まりを守るように指導してほしい」に関しては、学力階層別の傾向はみられなかった。

全体的にみて、子どもの学力階層によって学校への要望に違いがあり、学力階層が高いグループは教科指導ばかりを重視するというわけではなさそうだ。

## 4. 子どもへの接し方（子どもの学力階層別）

学習に向かわせる直接的な働きかけより、環境づくりのほうがより学力に関係がある。

◎ お子様との接し方について、次のことはどの程度あてはまりますか。

表C-2 子どもへの接し方（子どもの国語・算数学力階層別）

(%)

|                         | 国語   |      |      |      | 算数   |      |      |      |
|-------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|                         | A層   | B層   | C層   | D層   | A層   | B層   | C層   | D層   |
| 子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした   | 39.2 | 28.4 | 26.3 | 14.7 | 33.7 | 28.7 | 24.1 | 16.0 |
| 博物館や美術館に連れて行く           | 8.1  | 2.2  | 3.4  | 3.0  | 5.4  | 4.1  | 3.4  | 3.0  |
| 家には、本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある | 33.2 | 23.6 | 16.9 | 15.5 | 25.9 | 22.3 | 20.6 | 16.8 |
| 毎日子どもに朝食を食べさせている        | 93.2 | 90.6 | 87.1 | 82.8 | 91.0 | 90.7 | 87.9 | 81.8 |
| 子どもを決まった時間に寝かすようにしている   | 34.1 | 34.2 | 29.4 | 31.2 | 33.6 | 32.9 | 31.2 | 30.7 |
| 子どもがいつもお手伝いをする家事がある     | 27.4 | 24.6 | 21.2 | 25.0 | 20.7 | 26.4 | 27.5 | 24.0 |
| テレビゲームで遊ぶ時間は限定している      | 30.4 | 22.8 | 19.3 | 15.5 | 25.9 | 20.6 | 22.0 | 16.0 |
| ニュースや新聞記事について子どもと話す     | 21.6 | 17.1 | 13.9 | 15.5 | 18.3 | 17.8 | 16.3 | 14.8 |
| 子どもに一日の出来事を聞く           | 36.4 | 36.9 | 30.5 | 35.5 | 36.5 | 35.5 | 32.3 | 35.2 |
| ほとんど毎日、子どもに「勉強しなさい」という  | 18.6 | 21.2 | 16.5 | 19.3 | 17.8 | 18.3 | 21.0 | 19.1 |
| 子どもの勉強をみて教えている          | 16.7 | 12.7 | 8.8  | 11.8 | 13.3 | 14.2 | 10.6 | 11.6 |

注1) 数値は、「とてもあてはまる」と答えた比率。

注2) 網掛けは最大値。

「ほとんど毎日、子どもに『勉強しなさい』という」「子どもの勉強をみて教えている」というような学習に向かわせる直接的なコミュニケーションは、学力階層による差がほとんどない（表C-2）。「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」というような、間接的に学習へと向かわせるような環境づくりのほうが、より学力階層との関係が深い。「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」をA層とD層で比較したとき、国語、算数ともに、

A層はD層を大きく上回っている。さらに、「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「家には、本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある」などといった、家庭の文化を表すようなより間接的な項目で、学力との関係がみられた。

また、今回の質問項目においては、国語と算数で比較をすると、国語のほうが子どもへの接し方との関係が強い傾向があった。

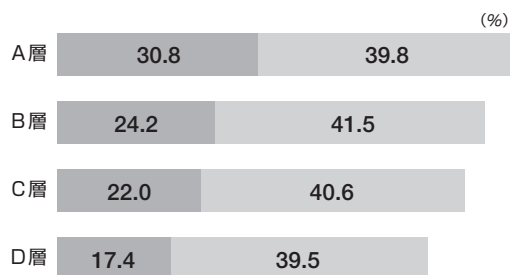
## 5. 保護者のふだんの行動（子どもの国語学力階層別）

保護者の知的な行動のみならず、趣味的行動も学力テスト得点と関連が大きい。

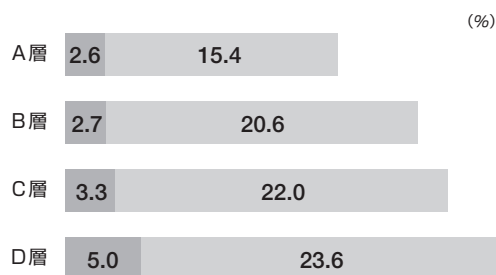
あなたは次のことをどの程度しますか。

よくする  
時々する

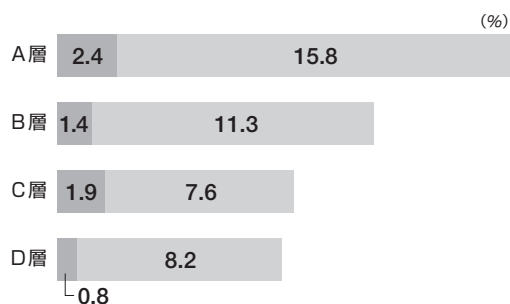
図C-3-1 本(雑誌や漫画を除く)を読む  
(子どもの国語学力階層別)



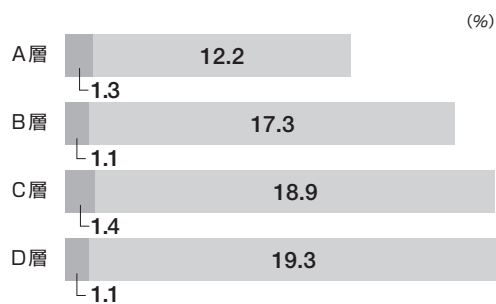
図C-3-2 スポーツ新聞や女性週刊誌を読む  
(子どもの国語学力階層別)



図C-3-3 クラシック音楽のコンサートへ行く  
(子どもの国語学力階層別)



図C-3-4 カラオケに行く  
(子どもの国語学力階層別)



注) 13項目中、4項目のみ抜粋して掲載。

保護者の行動の多くにおいて、総じて子どもの学力階層と関連がみられる。「本(雑誌や漫画を除く)を読む」ことを「よくする」保護者は、国語学力階層A層で30.8%となっているのに対し、D層では17.4%である(図C-3-1)。一方、同じ活字媒体でも「スポーツ新聞や女性週刊誌を読む」では、別の傾向が表れている。「よくする」+「時々する」を合わせると、A層では18.0%であるのに対し、D層では28.6%である(図C-3-2)。

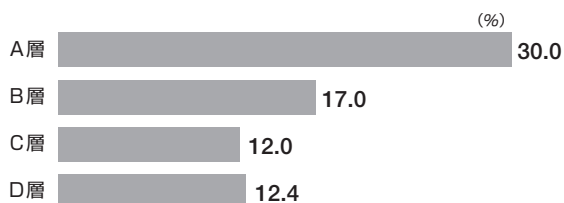
また、「クラシック音楽のコンサートへ行く」ことを「よくする」+「時々する」保護者は、A層で18.2%となっているのに対し、D層では9.0%にとどまる(図C-3-3)。一方、同じ音楽であっても「カラオケに行く」では、逆の傾向が見て取れる。「よくする」+「時々する」を合わせると、A層では13.5%であるのに対し、D層では20.4%にのぼった(図C-3-4)。

## 6. 教育意識（子どもの国語学力階層別）

職業資格や技能を身につけさせることの重視度合いは、学力階層と関係が深い。

◎ あなたは、お子様の教育についてどのようにお考えですか。

図C-4-1 子どもにはできるだけ高い学歴を身につけさせたい（子どもの国語学力階層別）



図C-4-2 子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している（子どもの国語学力階層別）



図C-4-3 子どもには職業資格や技能を身につけさせたい（子どもの国語学力階層別）



注1) 数値は、「とてもそう思う」と答えた比率。

注2) 7項目中、3項目のみ抜粋して掲載。

教育意識をたずねた7つの項目は、いずれも子どもの学力階層と関係がある。ここでは国語の学力階層とのクロスデータを3つ示す。まず、「子どもにはできるだけ高い学歴を身につけさせたい」について、「とてもそう思う」と答えた比率はA層で30.0%であったのに対し、C層で12.0%、D層で12.4%と学力階層間で大きな開きがあった(図C-4-1)。また、「子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している」のような、それほど学習に直結しないような教育意識に関して

も、先にあげた項目ほどではないものの、学力階層との関係が認められた(「とてもそう思う」がA層32.6%に対し、D層では23.1%)(図C-4-2)。

一方、D層で最も高い値を示す項目もあった。「子どもには職業資格や技能を身につけさせたい」は、「とてもそう思う」がA層、B層、C層でそれぞれ46.5%、46.9%、47.7%とあまり差がつかなかったものの、D層では52.8%と他と差が認められる(図C-4-3)。

## 7. 親子の行動（子どもの学力階層別）

学校関連の行動に学力階層との関係がある一方、趣味的な行動においては関係が薄い。

- ◎ この1年間を振り返ってください。あなたは、どのくらいひんぱんに、次のような行事にお子様と一緒に参加したり、活動したりしましたか。

表C-3 親子の行動（子どもの国語・算数学力階層別）

(%)

|                   | 国語   |      |      |      | 算数   |      |      |      |
|-------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|                   | A層   | B層   | C層   | D層   | A層   | B層   | C層   | D層   |
| 学校での行事（体育祭・学芸会など） | 81.4 | 79.2 | 76.8 | 74.1 | 82.2 | 79.4 | 75.9 | 72.0 |
| 学校の課題や自由研究        | 27.6 | 27.7 | 26.7 | 25.5 | 27.2 | 28.5 | 24.3 | 27.1 |
| 学校外のコンサート・劇・映画    | 9.8  | 10.1 | 7.9  | 11.1 | 8.6  | 11.0 | 8.4  | 12.0 |
| 行楽や旅行             | 22.0 | 19.0 | 19.8 | 18.9 | 19.2 | 22.6 | 20.0 | 17.5 |
| 趣味・スポーツ           | 24.2 | 25.4 | 31.8 | 29.5 | 26.6 | 30.7 | 27.5 | 27.3 |
| 買い物               | 39.0 | 42.2 | 45.6 | 40.6 | 38.5 | 40.9 | 43.6 | 44.6 |
| 外食                | 21.6 | 18.7 | 19.4 | 17.8 | 19.9 | 19.2 | 18.6 | 19.1 |

注1) 数値は、「ひんぱんにした」と答えた比率。

注2) 網掛けは最大値と最小値の差が5ポイント以上ある場合の最大値。

この問いで提示した7つの項目のうち、最も学力階層との関係がみられたのは「学校での行事（体育祭・学芸会など）」への参加であり、「ひんぱんにした」と答えた比率が国語A層、算数A層ともに8割を超えており、D層では両教科で7割強にとどまっている（表C-3）。また、両教科において、A層→B層→C層→D層の順で、階段状に数値が減

少している。

それ以外の項目においては、顕著な差は認められなかった。その中で、両教科の「買い物」や国語の「趣味・スポーツ」においては、中位より下の2つの階層（C層およびD層）が、上の2つの階層よりやや「ひんぱんにした」比率が高くなっていた。

## 8. 自分にとって重要なこと（子どもの学力階層別）

最も重視するのは「子どもが自立できるようにすること」。子どもの学力とも関係あり。

あなた自身にとって、次の事からはどのくらい重要ですか。

表C-4 自分にとって重要なこと（子どもの国語・算数学力階層別）

(%)

|                             | 国語   |      |      |      | 算数   |      |      |      |
|-----------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|                             | A層   | B層   | C層   | D層   | A層   | B層   | C層   | D層   |
| 仕事で成功すること                   | 21.2 | 18.7 | 21.2 | 26.4 | 18.7 | 21.7 | 24.9 | 24.3 |
| 結婚して幸せな家庭生活を送ること            | 71.9 | 72.6 | 70.1 | 69.9 | 73.3 | 71.3 | 67.6 | 71.7 |
| お金持ちになること                   | 7.7  | 8.1  | 9.3  | 10.8 | 7.5  | 8.8  | 9.8  | 11.1 |
| 親友をもつこと                     | 79.9 | 78.3 | 82.4 | 82.4 | 79.7 | 82.4 | 79.6 | 82.3 |
| 人の役に立つこと                    | 56.1 | 52.6 | 58.3 | 61.7 | 54.9 | 53.7 | 62.2 | 58.7 |
| 子どもを育てること                   | 80.7 | 82.3 | 81.1 | 77.8 | 81.7 | 81.3 | 79.9 | 78.1 |
| 親や親戚の近くで暮らすこと               | 12.0 | 15.1 | 14.6 | 14.8 | 14.1 | 10.1 | 17.2 | 15.3 |
| 世の中のさまざまな不平等を無くすために社会活動をする事 | 11.8 | 12.7 | 12.7 | 18.1 | 11.2 | 12.6 | 14.0 | 19.8 |
| 子どもには自分よりも恵まれた条件を与えること      | 25.7 | 28.2 | 30.5 | 30.9 | 25.3 | 28.4 | 29.2 | 34.2 |
| 好きなことを楽しむ時間をもつこと            | 57.8 | 55.0 | 61.6 | 58.9 | 57.7 | 56.4 | 58.2 | 61.3 |
| 子どもが自立できるようにすること            | 90.6 | 88.3 | 87.3 | 84.0 | 91.3 | 83.7 | 88.2 | 85.1 |
| 仕事で人に尊敬されること                | 25.3 | 24.7 | 30.1 | 33.4 | 23.8 | 28.0 | 32.1 | 32.5 |
| よい教育を受けること                  | 45.8 | 40.7 | 41.0 | 34.3 | 42.6 | 42.4 | 40.1 | 34.4 |

注1) 数値は、「とても重要」と答えた比率。

注2) 網掛けは最大値と最小値の差が5ポイント以上ある場合の最大値。

13項目中、「とても重要」の比率が最も高かったのはどの階層においても「子どもが自立できるようにすること」であった。さらに国語、算数ともに学力階層A層が他の階層より高い値を示した（国語90.6%、算数91.3%）（表C-4）。

子どもの学力階層D層で最も高い値となっている項目は、「仕事で成功すること」（国語）、「仕事で人に尊敬されること」（両教科）など

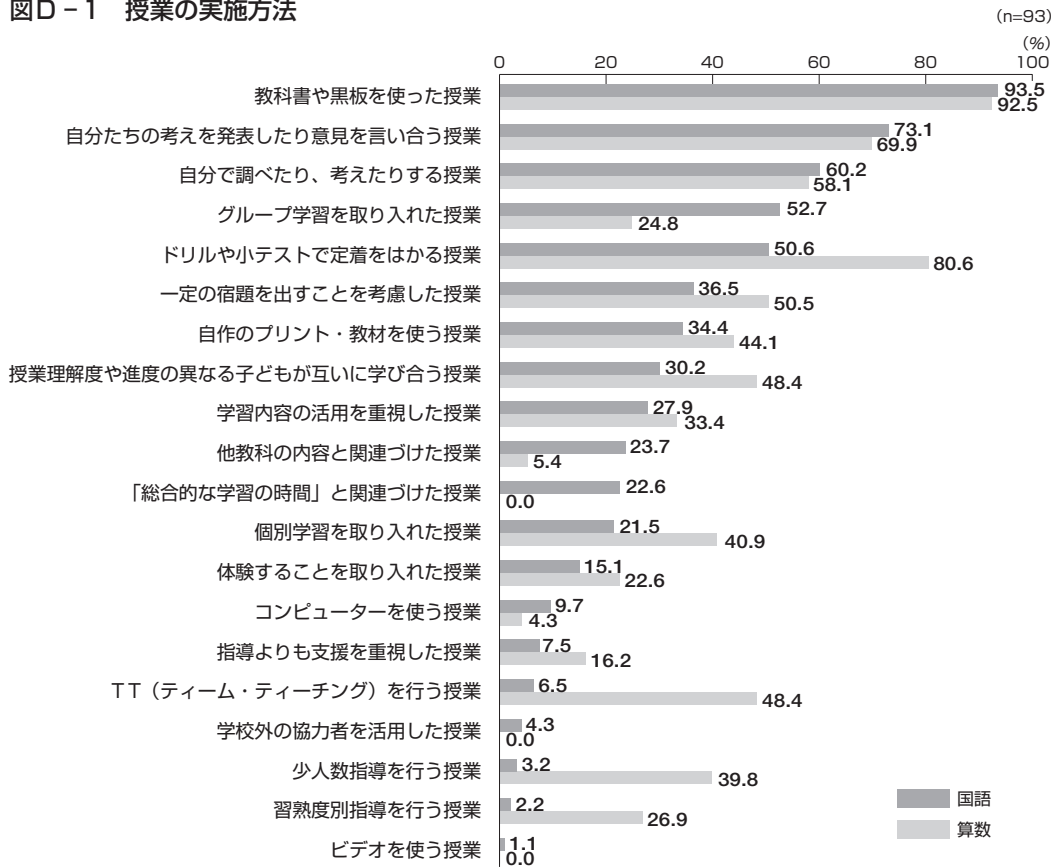
があげられる。「6. 教育意識」の項で「子どもには職業資格や技能を身につけさせたい」をD層が支持したことともあわせて考えると、実学志向の高さが特徴の層であるとみることもできる。その他、「子どもには自分よりも恵まれた条件を与えること」「世の中のさまざまな不平等を無くすために社会活動をする事」が高いのもD層の特徴である。

## 1. 授業の進め方

算数の授業では、国語以上に多様な教育方法を導入している。

あなたは、次の授業方法を実際にどのくらい行っていますか。

図D-1 授業の実施方法



注) 数値は「非常に多い」+「やや多い」の%。

学級担任の先生方が授業の中で用いている方法について、国語、算数別にたずねた(図D-1)。国語と算数共通して「教科書や黒板を使った授業」(9割)、「自分たちの考えを発表したり意見を言い合う授業」(7割)、「自分で調べたり、考えたりする授業」(6割)の比率が高かった。国語が算数を大きく上回る項目としては「グループ学習を取り入れた授業」「他教科の内容と関連づけた授業」「『総合的な学習の時間』と関連づけた授業」

等がある。

これら以外の方法は全般に国語より算数での比率が高く、算数の授業では教育効果の向上を目指したさまざまな教育方法を導入している状況が推察される結果となった。とりわけ「ドリルや小テストで定着をはかる授業」「TT(チーム・ティーチング)を行う授業」「少人数指導を行う授業」では算数での実施率が国語での実施率を30ポイント以上大きく上回っていた。



## 2. 宿題の頻度と内容

国語、算数とも宿題は頻繁に出される。その内容は、基礎の定着を目指す反復練習が多い。

あなたは、宿題をどのくらい出していますか。

表D-1 宿題を出す頻度（国語、算数）

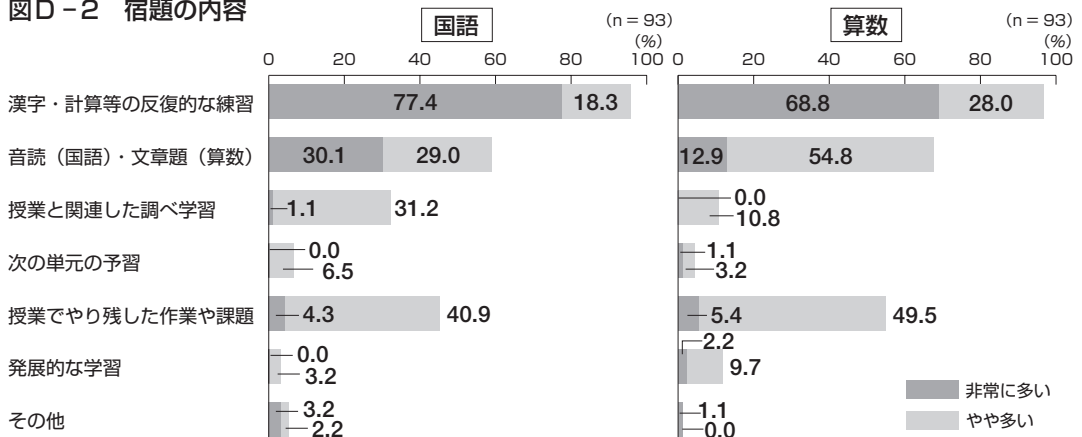
|            | 国語   | 算数   |
|------------|------|------|
| 毎日出す       | 57.0 | 45.2 |
| 2～3日に1回くらい | 33.3 | 45.2 |
| 週に1回くらい    | 5.4  | 5.4  |
| 月に1回くらい    | 0.0  | 1.1  |
| ほとんど出さない   | 4.3  | 2.2  |

(n = 93)  
(%)

注) 無回答・不明は省略した。

宿題の内容は、どのようなものが多いですか。

図D-2 宿題の内容



注) 図中の選択肢「漢字・計算等の反復的な練習」「音読 (国語)・文章題 (算数)」は、調査票では教科別にたずねており、実際の表記は「漢字などの反復的な練習」「音読」(以上国語)と「計算等の反復的な練習」「文章題」(以上算数)である。報告書では図上で国語と算数を比較するため、上記の選択肢を統合して表記した。

次に、宿題を出す頻度とその内容について見る。宿題を出す頻度としては「毎日出す」の比率が、国語で57.0%、算数で45.2%であり、国語のほうが高かった。「2～3日に1回くらい」まで合わせると国語、算数ともに9割以上であり、この2教科における宿題は、高い頻度で課せられている(表D-1)。

また図表は省略するが、宿題の量を見るために「平均的な児童にとって何分くらいかか

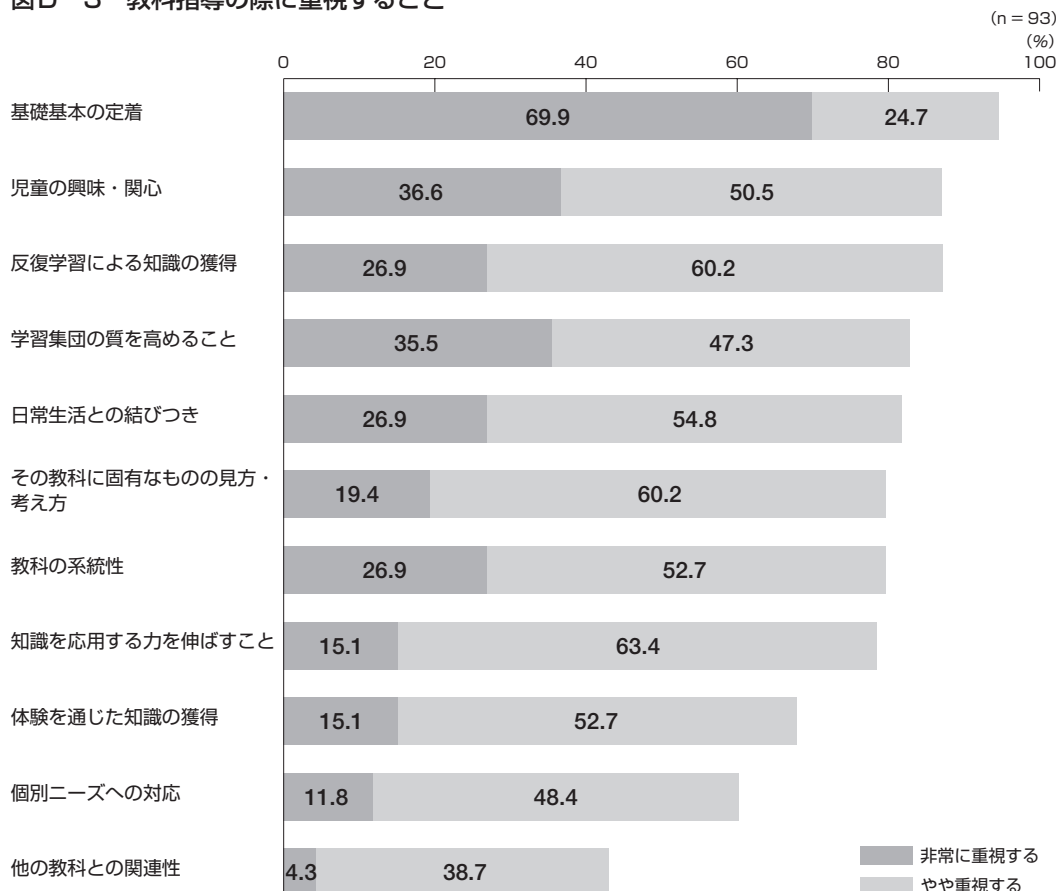
る内容か」をたずねたところ、国語、算数、両教科ともに「15分」「30分」を合わせると9割以上であった。その内容は、国語、算数ともに、漢字や計算等の「反復的な練習」といった基礎技能の定着を目指すものが中心であり、この他国語の「音読」や算数の「文章題」、両教科ともに「授業でやり残した作業や課題」などがあげられた(図D-2)。

### 3. 教科指導の重視点

小学校の教科指導においては、「基礎基本の定着」が「非常に重視」されている。

◎ 教科指導を行う際に、あなたは次のことをどのくらい重視しますか。

図D-3 教科指導の際に重視すること



教師は日ごろの教科指導において何を重視しているか、「教科指導の際に重視していること」についてたずねた(図D-3)。結果、「基礎基本の定着」を「非常に重視する」と回答した比率がおよそ7割であり、他の項目と比べて特に重視されていた。さらに「やや重視する」までを合わせると9割以上になり、小学校教育の特性があらわれた。

その他の項目も全体的に重視する割合が高く、「非常に重視する」と「やや重視する」を合わせた結果を見ると(以下同)、「児童の

興味・関心」「反復学習による知識の獲得」がいずれも87.1%であった。次いで「学習集団の質を高めること」「日常生活との結びつき」が8割台、「その教科に固有なものの見方・考え方」「教科の系統性」「知識を応用する力を伸ばすこと」等が7割台、「個別ニーズへの対応」が6割台で続いた。

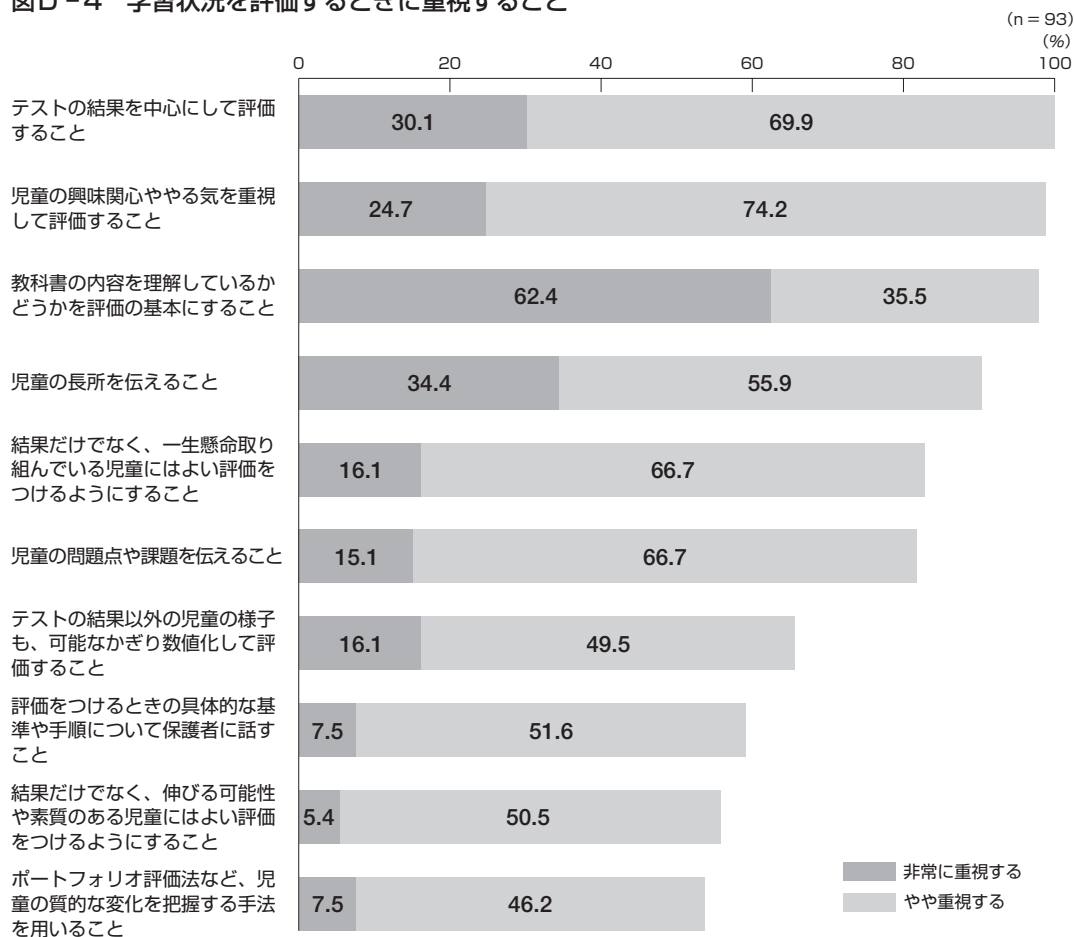
「他の教科との関連性」については5割に満たず、他項目と比べて重視する割合が低かった。

## 4. 学習状況評価の方針

学習状況の評価においては、「教科書の内容を理解しているか」を「非常に重視」。

Q あなたが児童の学習状況进行评估するときに、次のことをどの程度重視しますか。

図D-4 学習状況进行评估するときに重視すること



教師は児童の学習状況进行评估する際にどのような点を重視しているか、方針をたずねた(図D-4)。「非常に重視する」との回答に着目すると「教科書の内容を理解しているかどうかを評価の基本にすること」の割合が他の項目を大幅に上回っていた。また「やや重視する」まで合わせてみると、「テストの結果を中心に評価すること」「児童の興味関心ややる気を重視して評価すること」等の項目の比率が高かった。これらは前頁で記述

した「教科指導の重視点」として「基礎基本の定着」「児童の興味・関心」「反復学習による知識の獲得」等が重視されていた状況に呼応する結果といえる。

さらに「テストの結果以外の児童の様子も、可能なかぎり数値化して評価すること」「評価をつけるときの具体的な基準や手順について保護者に話すこと」等も6割前後であり、評価全般の数値化と透明化が、課題として明確に認識されつつある。

## 5. テストの実施と活用状況

自作の小テストを含め、テスト活用によりきめ細かく児童の学習理解度を確認。

Q あなたのクラスでは、どのようなテストを実施していますか。

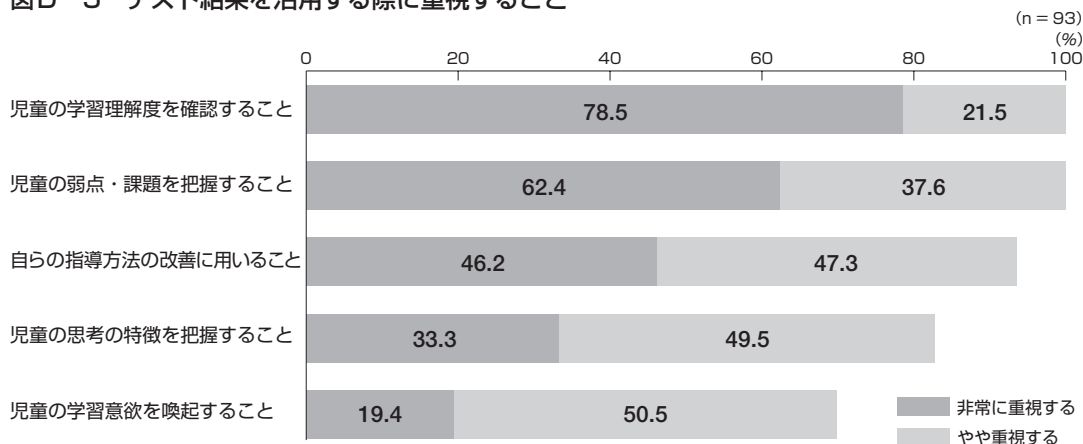
表D-2 テスト実施比率（種類別）

|                   | (n = 93)<br>(%) |      |
|-------------------|-----------------|------|
|                   | 国語              | 算数   |
| 小テスト（自作）          | 63.4            | 47.3 |
| 小テスト（市販）          | 48.4            | 51.6 |
| 単元末テスト（自作）        | 3.2             | 10.8 |
| 単元末テスト（市販）        | 98.9            | 96.8 |
| 学期末など、まとめのテスト（自作） | 5.4             | 5.4  |
| 学期末など、まとめのテスト（市販） | 74.2            | 74.2 |

注）複数回答。

Q テスト結果を活用する際に、あなたは次のことをどの程度重視しますか。

図D-5 テスト結果を活用する際に重視すること



前頁で見たように、学習状況の評価として「テストの結果を中心にして評価すること」を重視する割合は非常に高かった。実際、今回の調査では、小テスト、単元末テスト、学期末テストをそれぞれ実施している状況が浮き彫りとなった（表D-2）。このうち、小テストは自作のものも多く、学級担任の先生方個々人が、状況に即してきめ細かく児童の学習理解をフォローしている様子がうかがえ

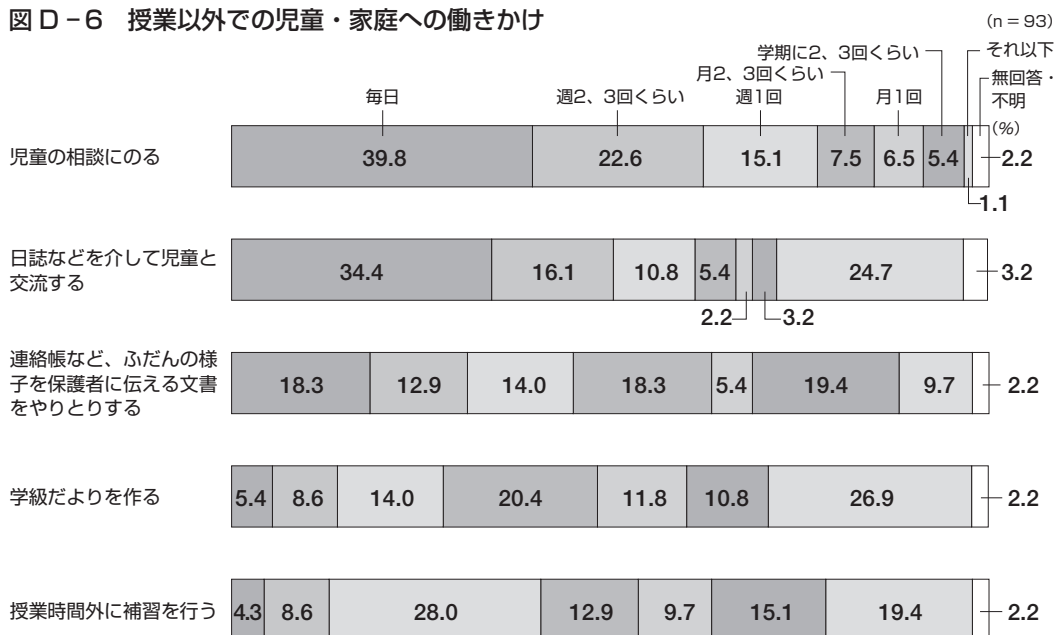
る。このことは、テスト結果の活用の重視点として、「児童の学習理解度を確認すること」「児童の弱点・課題を把握すること」が上位に認識されていることにもあらわれている。この他、テスト結果の活用の重視点としては、「自らの指導方法の改善に用いること」「児童の思考の特徴を把握すること」等が重視されていた（図D-5）。

## 6. ふだんの教育活動

担任の先生と児童の教育的なふれあいは日常的に行われている。補習は4割が週1回以上実施。

㊦ ふだんの教育活動についてうかがいます。あなたは、現在、以下のことをどのくらい行っていますか。

図 D-6 授業以外での児童・家庭への働きかけ



ここからは、担任の先生が行っている授業以外でのふだんの教育活動の状況について見る(図D-6)。「児童の相談にのる」については4割が「毎日」、2割強が「週2、3回くらい」行っていると、担任教員と児童の教育的な対話やふれあいが日常的に実施されている様子が浮き彫りとなった。「日誌」などを介した交流では、「毎日」や「週2、3回くらい」など頻繁に行う5割ほどの層と、「学期に2、3回くらい」「それ以下」の3割近くの層とに二極化しているようである。

一方、家庭との連絡状況について見ると、「連絡帳など、ふだんの様子を保護者に伝える文書をやりとりする」は「毎日」を含めて3割が「週2、3回くらい」以上実施しており、家庭連絡の主要な手立てとなっている。「学級だよりを作る」では4割近くが「学期に2、3回くらい」「それ以下」であった。

また「授業時間外に補習を行う」については4割程度が「週1回」以上実施しているという結果であった。

## 7. 教育向上のための努力

同僚間での授業の相互検討や授業の参観など、学校内部での相互研鑽を活発に実施。

◎ 学会の研修会や自主的な学習会に年にどのくらい参加していますか。

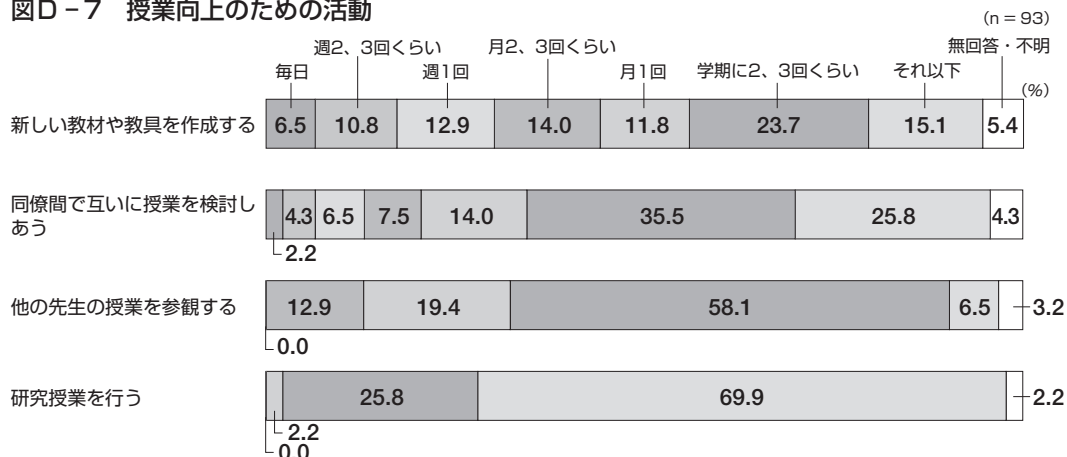
表D-3 研修会等への参加状況

(n = 93)  
(%)

|        | 教育委員会・教育センターが主催する公的な研修会 | 教師同士が校外で自主的に運営するサークル・研究会 |
|--------|-------------------------|--------------------------|
| 年の参加回数 |                         |                          |
| 0回     | 4.3                     | 43.0                     |
| 1～5回   | 71.0                    | 24.7                     |
| 6～10回  | 17.2                    | 20.4                     |
| 11回以上  | 3.2                     | 8.6                      |
| 無回答・不明 | 4.3                     | 3.2                      |

◎ あなたは、現在、以下のことをどのくらい行っていますか。

図D-7 授業向上のための活動



注1) 「他の先生の授業を参観する」の「毎日」～「週1回」は0.0%。

注2) 「研究授業を行う」の「毎日」～「月2, 3回くらい」は0.0%。

担任の先生は、自らの教育技術・実践を向上させるためのさまざまな努力を行っている。まず研修会への参加であるが、教委等が主催する公的な研修会については、7割が年に「1～5回」出席していた。教師の自主的なサークルや研究会は、参加が所属者に限られるためか4割が不参加である一方、3割近くが年6回以上の参加となっている（表D-3）。

授業向上のための活動としては、4割以上

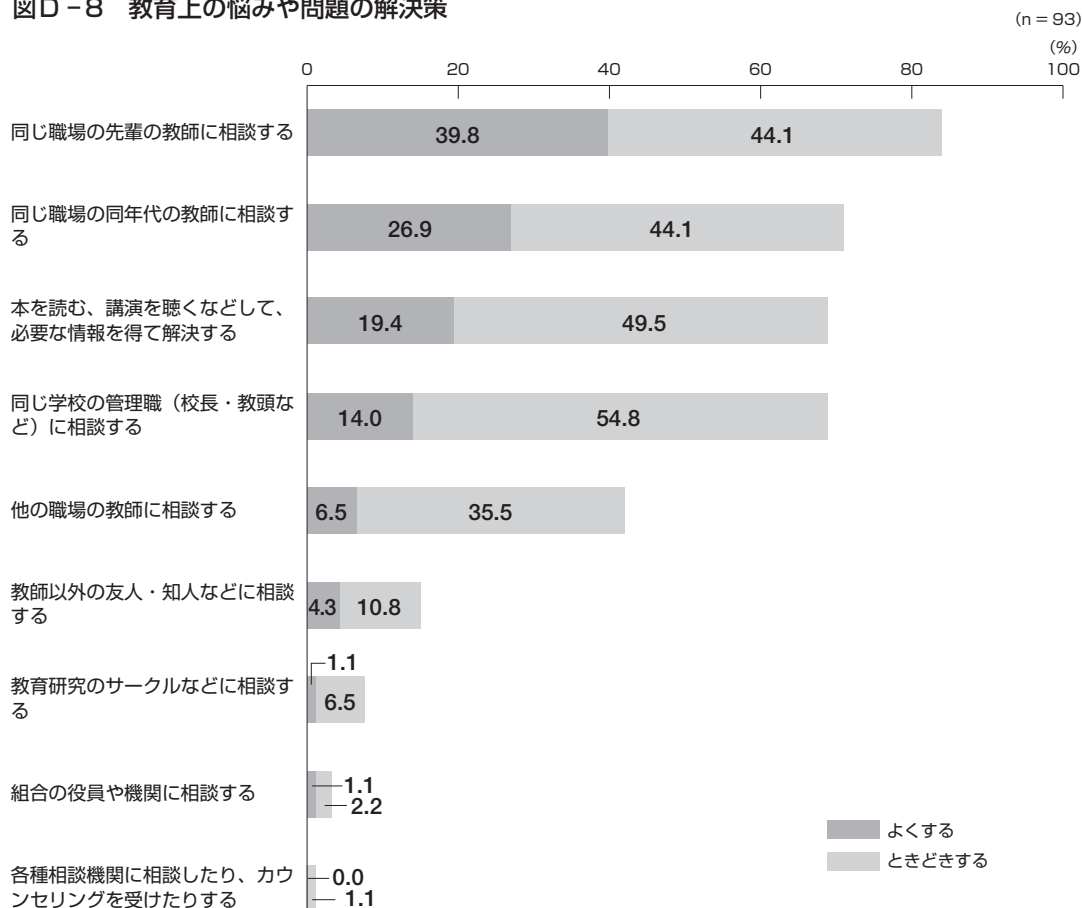
が、少なくとも「月2, 3回くらい」以上は新たな教材・教具の作成に尽力している（図D-7）。また概ね3割以上が「同僚間で互いに授業を検討しあう」ことや「他の先生の授業を参観する」ことを少なくとも「月1回」以上実施しており、教員相互の研鑽が比較的活発に実施されている状況が示された。わが国の特質とされる「教員の研修文化」の存在が、本調査の結果でも示されているといえよう。

## 8. 教育上の悩みや問題の解決策

勤務校内での同僚間の相談に加え、学校を超えた相談などの支援が行われている。

あなたは教育実践上の悩みや問題に突き当たったとき、どのように解決しますか。

図D-8 教育上の悩みや問題の解決策



担任の先生が教育実践上の悩みや問題点が生じたとき、どのような方法で、それを解決しているかたずねた（図D-8）。「同じ職場の先輩の教師に相談する」が8割以上（「よくする」＋「ときどきする」の％、以下同）、次いで「同じ職場の同年代の教師に相談する」が続いた。「本を読む、講演を聴くなどして、必要な情報を得て解決する」といった、問題解決のための自己学習も7割近い比率であった。また、「他の職場の教師に相談する」も

4割以上であった。

前頁では、教員同僚間の相互研鑽が活発に実施されている事実と、教員の研修文化の存在を指摘した。ここでは、学校間の異動が行われる公立学校の教員ならではの特質といえようが、勤務校内部の同僚間の縦横（管理職、先輩、同輩）の教えあい、相談活動に加えて、学校を超えた「相互支援のネットワーク」が形成されている様子が示された。